

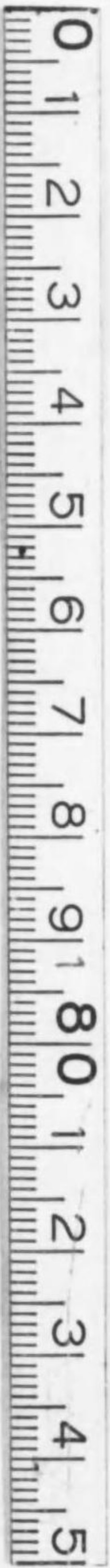
特 257

497

高等小學
補充國語讀本
全



上戸尋常高等小學校



始



全目次

第一部

| | | |
|------------|---------------------|----|
| 一 伸びゆくもの | 増田 義一 | 一 |
| 二 少年に望む | 二葉亭四迷 | 三 |
| 三 ポチ | 柴田 鳩翁 | 五 |
| 四 大根責の話 | 北原 白秋 | 六 |
| 五 良寛様 | 和田埴謙三 | 七 |
| 六 笑話 | 石 ^{子爵} 黒忠恵 | 三三 |
| 七 禽聲獸語 | 新井白石 | 三六 |
| 八 梅醋で染めた園旗 | 前田 晁 | 三九 |
| 九 鬼作左の嬉し泣き | 藤村 作 | 四一 |
| 一〇 手紙の懐しさ | 三浦梅園 | 四二 |
| 一一 英雄の反面 | | |
| 一二 怠らずゆかば | | |

目次

第二部

| | | |
|---------|--------|----|
| 一 鳥飼藏人 | 五十嵐力 | 四三 |
| 二 専心 | 北原白秋 | 四六 |
| 三 良夜 | 徳富蘆花 | 五二 |
| 四 川中島の戦 | 頼山陽 | 五四 |
| 五 落葉 | 島崎藤村 | 五九 |
| 六 俳句詳釋 | 沼波瓊音 | 六三 |
| 七 出郷 | 長谷川三葉亭 | 六六 |
| 八 無手勝流 | 依田學海 | 七三 |
| 九 一谷の戦 | 頼山陽 | 七三 |
| 一〇 早春 | 吉江高松 | 七五 |
| 第三部 | | |
| 一 人生の曙 | | 八一 |
| 二 うてや鼓 | 島崎藤村 | 八四 |

| | | |
|----------|---------|-----|
| 三 椰子の實 | 島崎藤村 | 八六 |
| 四 眞田幸村父子 | (名將言行録) | 八七 |
| 五 大河の水 | 芥川龍之介 | 九二 |
| 六 落梅の音 | 薄田泣菫 | 九九 |
| 七 雨の趣味 | 黒田鶴心 | 一〇三 |
| 八 瀑の音 | 鈴木鼓村 | 一〇七 |
| 九 川柳點 | 金子元臣 | 一〇九 |
| 一〇 扇の的 | | 一一四 |
| 一一 希望 | 澤柳政太郎 | 一二九 |

第四部

| | | |
|----------|------|-----|
| 一 希望 | 大隈重信 | 一三五 |
| 二 落葉する頃 | 相馬御風 | 一三八 |
| 三 産土神と氏神 | 芳賀矢一 | 一三三 |

| | | |
|-----------|--------|----|
| 四 詩二篇 | 大木篤夫 | 一六 |
| 五 言葉の斷續 | 薄田泣菫 | 一七 |
| 六 文章の道 | 島崎藤村 | 一八 |
| 七 人の諫 | 新井白石 | 一九 |
| 八 大地に立つ | 福田正夫 | 二〇 |
| 九 思郷 | 現代短歌諸家 | 二一 |
| 一〇 小話三題 | 柳澤淇園 | 二二 |
| 一一 二月よみの光 | 諸家 | 二三 |
| 一二 笥 | 薄田泣菫 | 二四 |
| 一三 愛國心 | 大島正徳 | 二五 |

補充國語讀本 第一部

一 伸びゆくもの

春は来た。うりゝかな春は訪れて来た。遠山の雪はまだ消えないが、垣根のほとりには陽炎がゆり／＼のぼつて、草の若芽も頭を擡げ、慈愛の光を浴びながら、青い空の方へ、麗しい日の光の方へと伸びてゐる。明るい空の彼方には雲雀がはち切れるやうな、精いつばいの力で鳴いてゐる。魂全體の叫びだと詩人はうたつてゐるが、まことに少しの躊躇も弛緩もない歡喜の叫びではないか。希望に満ちた快活な叫びではないか。

一 伸びゆくもの

年々歳々春はめぐつて来る。しかも春は常に若く、常に新しい。新しいものは尊い。生氣に溢れた響は尊い。そこに創造の力がこもつてゐる。この春の姿こそは實に我等の心なのだ。

世に偉人と仰がれ、傑士と尊ばれる人は何時迄も若い人であり、何時迄も伸びてゆく力を失はない人である。この若さ、伸びてゆく力こそは、國の寶である。世の寶である。すべての幸福と光榮とがこの中から生れ出る。私たちは少年である。私たちの全身には今、新しい力が漲つてゐる。さうして今この美しい我が國土の限りない慈愛の光に包まれて、光榮に胸はとどろき、希望に眼は輝いてゐる。春よとこしへに若くあれ。

増田義一
實業之日本社
長。新潟縣の人。
明治二年生。

二 少年に望む

増田義一

少年諸君は、日本帝國の將來を双肩に擔つて立たなければならぬ。日本帝國が益々立派になるのもならぬのも、諸君の覺悟と努力の如何によつて決するのである。

日本帝國は、世界に類の無い皇統連綿たる美しい國である。世界に誇るべき立派な歴史を有してゐる國である。我々が日本國民たることは、思へば思ふほど有難い限りである。私はこの國に生れて来たことを、一日として感謝しないことはない。私共の祖先は、太陽の如く君臨します。日の御子の高遠なる御理想を體して、克く忠に、克く孝に、三千年の光輝ある歴史を建設してきたのである。この苦心經營のあとをよく見よく察せよ。さうしたら、諸君は愛國の熱情に燃えないではありぬまい。大勇猛心を振つて奮起しないではありぬまい。

燃え

薄一簿
出づ。

世に國家を持たない人民ほど不幸なものはない。國家を
輕んずるやうな浮薄な思想は、私共の斷呼として斥けねばな
りないものである。格言に「忠臣は孝子の門に出づ」とあるが、
未だ不孝者の中に、忠臣の士の出たためしはない。博愛人道
と「國家を愛する精神」とは矛盾するものではない。否、眞に國
家を愛する人にして、はじめて眞に人道的行爲をなし得るも
のである。國家を愛することの出來ないやうな人間には斷
じて人間を愛することの出來たためしはない。

少年諸君よ。私が諸君に期待する所は甚だ大きい。諸君
は、その純眞な心を以て、神州三千年の光輝ある歴史をひもと
くがよい。世界の何處に斯かる歴史を有してゐる國がある
か。富士の高峯の萬古に聳え立つ國、櫻の花の爛漫と咲き亂
れる國、一系の皇統の無窮にしらしめす國の美しき有難さが、
しみじみと感ぜられ來るであらう。

たゞ有難淚のこぼれるやうな感激——これが諸君、一番大
切である。この感激あつてこそ、絶大の勇猛心も起り、不朽の
大事業も成されるのである。私が國を愛する精神を、少年諸
君の若い胸中に燃したいと念ずる所以はこゝにある。

(日本少年)

三ボチ

ニ葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ思ひ出すのは、親のこと……
それにボチのことだ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の春雨のしとしとと
降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口か
ら寢てしまつたがふと目を覺ますと、遠くで微にきやん／＼

ニ葉亭四迷
本姓名は長谷川
辰之助。小説家。
東京市の人。明
治四十二年歿。
年四十八。

といふやうな聲がする。不思議に思つて耳を澄してゐると次第に大きく高くなつて、終には確に門前に聞える。かうなつてみると、疑もなく小犬の啼き聲だ。時々喉でも締められ、るやうに、けた、ましくきやんきやんと啼きたてる。その聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い遠い所へ消えてゆくかと思へば、忽ちまた近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くん／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、就中犬は大好きだから、近所の犬は大抵なじみだ。けれども、こんなかよわい、いたいけな聲で啼くのは一匹もないはずだから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出す、

「どうしたの。寝られぬのかえ。」

と母が寝返りをうつてこちらを向いた。私はこの返答はさ

なじみ

しおいて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つてなあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てて行つたのさ。」

「どうして棄てて行つたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。どこまでも相手になつて、その意味を説明してくれて、「もうおせいから黙つてお寝と優しくいつて、またあちりを向いてしまつた。」

私もまた夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、啼き聲が稍遠くなつた。寝られぬまゝに、私は夜着の中で、今聞いた母の説明を繰り返し／＼味つてみた。まづどこかの飼犬が縁の下で兒を生んどとする。小さなむくむくしたのが重なり

あわて

あつて、首をもたげて、みい／＼と乳房を探してゐるところへ親犬がよそかり歸つて来て、その側へどつと横になり、片端から抱へこんで、ペろ／＼なめると、小さいから舌の先でたわいもなくころ／＼とところがされる。ころがされては大騒ぎして起き返り、またよち／＼とはひ寄つてぽつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわててちうと吸ひついて、小さな両手でもみたて／＼吸ひ出すと、甘い温かな乳汁がどく／＼と出て来て、喉へ流れこみ胸を下つて、何ともいへずおいしい。と腋の下から、まじ乳首にありつかぬ兄弟が鼻面で割りこんで来る。取りれまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒ぎやつてみるが、とうとう取りれてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸ひつく。そのうちにお腹も一ぱいになり、親の肌で體も温つて、どろけそうないゝ心持になり、ついうと／＼となると、含んだ乳首がぬけ

生えた

さうになる。夢心地にもあわててまた吸ひついて、一しきり吸ひたてるが、ぐきにまたたわいなくうと／＼となつて、乳首が終に口をぬける。ぬけても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

その時、忽ち暗闇から、もじや／＼と毛の生えた、節々立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところをむずとひつつかみ、真に吊す。驚いて目をぽつちりあけ、たいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つてもがくやちに、頭かり何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出りれない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足掻が自由になると、襟もとをつかまれて、高い／＼所からどさりと落された。うろうろとして、そこらを見廻すけれども、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間にぬれしよぼたれ、おそろしく寒

くなる。身ぶるひ一つして、くんと親を呼んでみるが、どこからも出て来ない。途方に暮れてよちよちとはひ出し、雨の夜中をヒッひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る聲が、さつき一度門前へ来て、またどこへかさまよつて行つたやうだつたが、それがいつかまた戻つて来て、どこをどう潜りこんだのか、今は啼き聲がまさしく玄關先に聞える。

(平尺)

四大根賣の話

柴田鳩翁

柴田鳩翁
名は子。京都の人。天保十年(西暦一八三九年)五月廿七日歿。年五十七。

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日、例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣り歩いたが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、は

八つさがり
午後二時過。

や晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまりぬ。これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながらいつの間、にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根大根」と賣り歩いた。

呼んだのぢや

或御屋敷の表長屋の窓の内から、「これ大根屋」と呼ぶ。やれうれしや、まづ知行にありついたらと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には何某と標札が打つてある。荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあげ、且那殿がいま形代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら、その大根はいくらじや」といふ。「百に三把でござります」といへば、それは高い。二十四文づつにして置け」といはれ

る。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣き歩いて、まだ一把も賣れませぬ。どうしても賣つて歸りねばならぬ大根、かけ値は一切申しませぬ。といふ。かの五侍がぶりぶり、それでも高い。まからずば、まづよしにせう。邪魔ながら持つて歸れ。と言ひ捨て、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろく〜といつて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、ぼて、つまらぬ。もう日の入には間もなし。なんでも四百の銀を持つて歸りぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。なんとしたものでありや。と、手を組んで思案をしながら、縁先の金だらひにふり目をがついた。障子は締めである。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下へせつと隠す。怖

えらひ

いものや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて、五尺の身體をしばらくも置くべき所がない。

そこで荷を擔ぎ出して門口を出ようとすると、障子の内から、「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で、まかりませぬ。といふと、「いや〜、値はねぎるまい。その大根買は。」といひさま、障子をさらりと明けられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、何把ほど入ります。はした賣はできません。といふ。いや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この縁先へ並べてくれい。といはれる。さあ大根屋も一所懸命、障子の締つてあるうちなり、金だらひの出しやうもありうに、今更金せりひが出されもせず。といつて賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はずうろく〜としてゐると、かのお

待が、大根屋の顔をきつと見て、「おれはきつうろにへてゐるぞよ。まづ金だらひわかり出して、大根の数を数へて見よ」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるかぶたれるかと、わなく震へながら、かの金だらひを取づかしさうにそつと出して、土に手をつき、眞平御免なされて下さませ。何を隠しませう。先刻も申します通り、けさかりまだ一文の商ひもいたしません。このまゝ歸りますると、明日親子五人が食べますることになりませぬ。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりませぬ。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命を助けなされて下さりませ。と、色青ぐめて、土にあたまをすりつけて、わびごとをする。

かのお侍、思ひの外氣だてのよい人で、更に立腹の氣色も見えず、「いや、そのわび言には及ばぬ。まづ大根の数をよんで見よ」といはれる。こは、なから、大根を縁へ積み上げ

二は〇
く

たところが二十三把。かのお侍、マがて七百六十四文の錢をとり出し、かの大根賣を呼んで、「あそちがいふ通りに、二十三把、七百六十四文、序に金だらひを添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この金だらひは顔や手足を洗ふ道具なれども、たゞ顔・手足をあらふ計りではあるまい。心の洗ひやうもあるものぢや。無禮は咎めぬ。この金だらひを遣す。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。と言ひ捨て、障子を締めて、内へはいる。かの大根屋もこれから本心になつて夜晝働き、遂に三年目には、相應な八百屋になつたといふことである。

(鳩翁道話)

五 良寛様

北原白秋

北原白秋
名は隆吉
詩人
福岡縣の人

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。
 一に童男童女、二に手毬、三におぼしき、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事がまたどんなに嬉しかつたかが思はれる。
 その良寛様も、子供たちには随分馬鹿にされて、盛になぶられたり、かりかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様があり難い。
 ある時、例のとほりに子供たちとかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ」といふかはいゝ聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日の暮れ時で、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちり／＼、點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて、一人残らずこぞ／＼と歸つて了つた。そこは子供ばかり、良寛様も何もうつちやりかしてである。無論、いくら待つても、「もういゝよ」といふものはない。その中に日が暮れ、長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けて了つた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心かり目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。
 その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。
 それから又ある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで見つけれられては大變だといふので、早速田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに顔かりすつぽりと稻葉をかぶつて、おど／＼してゐた。すると子供たちは又例の通り一人のこらさずこぞ／＼と歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも御存知がない。又日が

と歸つて了つた。そこは子供ばかり、良寛様も何もうつちやりかしてである。無論、いくら待つても、「もういゝよ」といふものはない。その中に日が暮れ、長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けて了つた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心かり目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。
 その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。
 それから又ある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで見つけれられては大變だといふので、早速田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに顔かりすつぽりと稻葉をかぶつて、おど／＼してゐた。すると子供たちは又例の通り一人のこらさずこぞ／＼と歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも御存知がない。又日が

暮れて夜が来て、又夜が明けた。稻村には霜がまつ白に置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて来て、何の氣もなく稻たばをやにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる。「おや、良寛様が」といふと、慌てて、ぞつとしろ、ぞつとしろ、子供が見つける。

その心のおどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。又ある日のことである。その良寛様が子たちとおはじきをしてゐられた。沙門良寛傳に「禪師頗る大勝を博して、賭物の熬豆を多く得」と書いてあるから、餘程乗氣であつたりしい。丁度その時誰かが入つて来た。そして「おやおや良寛様、なかくあなた様はおはじきがお上手で」と褒めると、罪がなまいこと、良寛様は面を赤くして、さもしく、恥づかしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押しかくしたといふ。その心の初々しさ。全く佛の前に子供らしくおとなしく身をへりくだる

心である。

尊い聖心はすべてこの童心を源とする。禪師が如何に天真爛漫であつたかといふことをもう一つお話する。

ある時赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供がひとり泣いてゐた。良寛様が通りかゝつて、「どうしたんだ」と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べた」といふ。「よし、よし、それではわしが取つてあげる。泣くんでないぞ」といひながら、やぐとこさと木の上に這ひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐる中に、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、おいしいのなんの良寛様は夢中になつて噛るは、まるで猿蟹合戦のお猿のやうに、むしろと食べてゐる。下にゐる子供こそあれ、それを見て、火のやうに泣叫んだのではじめて良

寛様は氣がついた。「さあしまつた、これは」といふので、慌てて枝をゆさぶつたといふ話。

思つてもその慌て方をかき、罪なき、真正直さ。その子供らしさ。全く涙がこぼれる程うれしいではないか。

禪師の王のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔そのままである。それは何ものにも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日父親かりひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたまた叩かれた。「親を睨むやうな奴は鯨になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて来ない。さあ、家内中大心配で、彼方此方と捜し索めると、ある濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊どうした」といふと、榮坊曰く、「俺まだ鯨にならぬか。」

鯨になるといはれたので、ほんたうに鯨になると思つて一心に海を視つめてふるへて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのでありう。童を欺く大人こそ禍である。

(洗心雜誌)

六 笑話

一 梨泥棒

寓話作者ラフォンテーヌは毎朝食事後果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、あとでと思つて、一箇の梨を煖爐のかざり臺の上へ載せて置いて、一寸書齋へ往つた。その中に一人の友人が來訪したので、その室へ通した。彼が書齋から出てその室に來て見ると、件の梨が見えぬ。「おや誰か梨を食べ

ラフォンテーヌ
佛國の人(西
曆一六三二年
—一六九五年)

食はぬ

六笑話

たのかしり。友人は何食はぬ顔で僕ではないよ。「君でなく
て幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨に亜硫酸を入
れて置いたのだ。友人は驚いて、ソリや大變だ。解毒劑は無
いか」といふと、安心したまへ。今のは梨泥棒を見出す爲の計
略なんだ。(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

二、老病で

或人その奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪死に當る。覺
悟せよ」といふ嚴命を蒙つた。彼は額を地に摺り附けて、「ど
うぞ命だけは御助け下さるやうにと歎願に及んだ。それは相成
りぬ。しかし死に方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死
にたいか即答せよ」。彼は畏る頭を擧げて、昔に變りぬ御慈悲
あり難く存じます。願はくは老病で死にたうございます。王
は失笑して、遂にその命を助けられた。(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

和田垣謙三
法學博士、
にして、
帝國大學法
科農林科の教授
に歴任す。大正
八年七月歿す。
(三五二〇年)
二五七九年)

擇一択
即一即

七 禽聲獸語

一、鳩梟に教ふ

梟鳩に逢ふ。鳩曰はく、「子まさに安くに之かんとするかと。
梟曰はく、「われまさに東に徒りんとす」と。鳩曰はく、「何の故ぞ
と。梟曰はく、「郷人皆わが鳴を惡む。故を以て東に徒ると。
鳩曰はく、「子能く鳴を更むれば可なり。鳴を更むること能は
ずんば、東に徒るとも人なほ子の聲を惡まん」と。(説苑)

二、狐虎の威を假る

虎百獸を求めて食ひ、狐を得たり。狐曰はく、「子敢へてわれ
を食ふことなかれ。天帝われをして百獸に長たらしむ。今
子われを食はば、これ天帝の命に逆ふなり。子われを以て信
ならずとなさば、われ子の爲に先行せん。子わが後に隨ひて
觀よ。百獸われを見て敢へて走りざらんや」と。虎以て然り

七 禽聲獸語

となす。故に遂にこれと行く。獸これを見て皆走る。虎獸の已を畏れて走るを知らず、おもへらく狐を畏るるなりと。

(戰國策)

三、株を守る

宋人田を耕すものあり。田の中に株あり、兔走りて株に觸れ、頭を折りて死す。因つてその耒を釋つて株を守り、また兔を得んことを冀ふ。兔得べかりずして、身は宋國の笑となる

(韓非子)

八梅醋で染めた國旗

明治二十七年十月二十五日に、戦地を一巡して來いといふ大印を受け、翌日廣島を立つて朝鮮に向ひ十一月二

石黒忠恵
子爵。樞密領
關官。明治二十七
年當時は野戰
衛生長官であつ
た。弘化二年(一八
〇三)生。

日に朝鮮の漁隱島を出帆して、三日には兵站司令部がある元浦についた。司令官は陸軍少佐山縣俊信君であつた。私は其處の巡視を終り、他に向けて出發しようとする時、司令官が「閣下、暫く御待ち下さい。實は今日天長の佳節に、閣下が此處へお出で下さつたことは非常に喜ばしく存じます。現在此處に居るものは、將校下士卒軍夫まで凡て八十三人であり、正午には全部残りず山の上に登り、盃を擧げて陛下の萬歳を祝し奉らうと存じます。閣下、どうぞ此の音頭取をして下さい。」

といふ。私も大いに喜んで、

「それは結構がや。此方から願つても致したい。」

と、馬を体ませて、頭のつかへるやうな廠舎へもぐり込んで、時の來るのを待つて居つた。そのうち十一時になつた。司令官と山の上に登つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽鏡が

抜いてあり、又焼鯛を裂いて箆に堆く盛つてあつた。唯それ切りで、外には何も無い。すると山縣司令官があわただしく、「どうも困つた事が出来ました。是迄用意は致しましたが、肝心の酒を飲む盃がありません。」と、如何にも困つたといふ顔だ。なるほどそれは困つたと私も思つてゐると、司令官は俄に手を拍つて喜びました。

「天祐々々。濱邊へ行くと、牡蠣の貝が澤山ある。——閣下屈竟の盃が見つかりました。」

直ぐと従卒に命じて、牡蠣殻を拾ひにやつた。暫くして二人の従卒が箆に一杯づつの牡蠣殻を拾つて、きれいに洗つて持つて来た。

時計はもう十二時に近い。皆山上に整列した。すると山の下から一人の人夫が駆け上つて来た。「お待ち下さい。お待ち下さい。」

見れば手に日の丸の小旗を持つてゐる。どうしたのだらうと、一同の視線はその人夫に集注した。やがて人夫は私の前に立つて、その日の丸の紙旗を差出した。

「閣下、これを持つて音頭を取つて下さい。」

といつて旗を私にくれた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて、謹んで、

「天皇陛下萬歳」

と三唱した。皆がこれに和した。それから、皆飲め〜といふので、牡蠣の貝で盛んに飲んだ。

その時振つた旗を取つてよく見ると驚いた、半紙に梅醋で紅く日の丸を染めたので、ところぐに未だ紫蘇の葉が附いてゐる。その紙を飯粒で細い竹に貼りつけたのであつた。私はその牡蠣の貝と梅醋の旗とを鞆の中に入れて持ち歸つた。

川上 陸軍大將川上操
寺内 陸軍大將寺内正毅
野田 陸軍軍醫總監野田裕通
岡澤 陸軍大將岡澤精

鬼作左 本多重次
通稱作左衛門世に鬼作左と稱す
徳川家康の臣
文祿五年歿年六十八
新井白石 名は君美
徳川時代の大名政治家
享保十年歿年六十九

大本營に於て、御前でこの事を奏上して、右の二品を出して御覽に入れた。すると大帝はじつとそれを御覽遊ばされたりせられたが、そのうちに畏れ多くも御眼に御涙を御催し遊ばされた。それを拜して御前に列してゐた私は勿論、川上も寺内も野田も岡澤も皆感極まつて泣いた。

九 鬼作左の嬉し泣き

新井白石

天正十三年徳川殿御背中に疔といふもの出来て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡くしけれどもその驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自りもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて

天正十三年 正親町天皇の御代
徳川殿 徳川家康
時に年四十四

祈りぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

重次御枕に取りつきて泣く／＼申しけるは、殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、たゞどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上醫療其の詮なし。且は命を惜しむに似たり」とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、「斯程大事の腫物輕々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又、良醫して治し参りせんとするをも用ひ給はず、亡せにまはんこと、御心がりとは言ひながらあつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼いかでか治し参りすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ参らん。とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ「あれ止めよ」と仰せければ、近く侍

ふ人々走り出で引留め仰せらるべき旨ありせられ候。といふ。重次大いに聲を怒りして、最後の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿ばりの止めやうと罵つて出でんとす。されば候。その人を止めよとの御使がえこそ止めぬと申せとはおとなしくも候はぬ本多殿。といはれて、仰にさも候。とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか、家康いまだ死し果てぬに。従ひ家康が命終るとも、汝等が世に在りんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に残りて、若きものども捉して、我が家の絶えざらんやうを計りんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。と仰せければ、いや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、その詮なし。重次若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、

御塔
家康の女侍
小田原城主
北條氏直
天正十九年卒
年三十

武田
武田勝頼
天正十年織田徳川
の兩軍に攻められ、天目山で自殺した。
年三十七

足切りれて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交りんこと叶ふべき身なり。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くなりせたまひなば、他人までも候まじ、まづ御塔の北條殿、我が國々を取りんとし給はん、若き人々が行未久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて、氣後れしはか、しき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつたるかたはものは、徳川殿の譜代にて何がしといはれし、家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世に恥をさりすりん。と後指さされん事、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手を下げ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ参らせ

んが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候と申す。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに至りて、家康空しくなりんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも一日も生残つて、後の事よきにはかりふべしと存するや否や」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰をや背くべき」と申す。「さらば醫師召させよ」とて召さる。

醫師やがて参つて、「御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛み覺えさせ給はねば、艾を増し加ふること多くして後、聊か痛ませ給小由仰せければ、御藥をつけて参らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、濃水・血夥しう流れ出て、御惱ちどころに、輕ませたまへば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御前伺候の人々も感涙を

共に流しけり。(蕃翰譚)

前田晁
文字者。山梨縣
の人。明治十二
年生

一〇 手紙の懐しさ

前田晁

手紙といふものほどあはれに懐しいものはない。毎日郵便配達夫の来る時刻になると、窓に凭つてをどる胸を抑へながら、外面をじつと見てゐる人は澤山あるだらう。獨りで淋しくてたまらずにゐるやうな時は、勿論のことさうでない時でさへも、郵便！といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞ひ込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から来たのだらう。誰から来たのだらう。かういふ考へが忽ち浮んで来て、その郵便物を手にするまでの楽しさといつたりない。

いよ／＼それを手に取つて、封を切つて見る段になつて、最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても親友の蔽ひ隠しのない胸を開いたやうな手紙である。暫く逢はなかつた場合は勿論のこと、それほどでない時でさへも、心と心と相許した親友同士が向ひ合つて心の中を語り合ふやうな手紙に接すると、俄に自分の胸も開けて来て、先刻までの淋しさなどは何時の間にか雲散霧消してしまふ。

遠く故郷を離れてゐる者にとつては、生家からの消息も亦懐しいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、其の許には別段の障りもないか。こちら是一家打揃つて無事に暮してゐる。天候が定まりぬので作物の出来榮ばえはどうかと思つてゐるが先づ／＼この分ならばこの先天氣さへ續いたり豊年だらうと思ふ。

其の邊には何の懸念もなく、其の許は専心に勉強するがよい。

かういふ手紙は大抵きまつた文句を並べることが多いものだがそれでも、それを書いた人が年老いた父親であるとか優しい母親であるとか、または村の有力者として本當に忙しい長兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、様々なことが故郷といふ觀念と共に聯想されて来て、他人の手紙などに比すると、幾倍の興味があるか知れない。

ふだんならばうるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時によると、また久しく待たれたもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れてヒゞ茫然としてゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明らかに見やることが出来て、心の緊張を覺え、世間に處して行く上に於ける力と用意とを更に新にする様なことがある。一體人の頭は、時折何等かの刺戟を受けないと、どうかすると次第に腐つて行つて、終には因循になつたり姑息になつたり

しむがるものである。
手紙を受け取つた時のかういふ純な喜びを思ふと、私も亦、
こちらからも胸を聞いた眞情の流露したやうな手紙を書いて
やつて、人にも同じ喜びを味はせたいと思ふ。

(生きた文章の道)

二 英雄の半面

藤村 作

世に英雄豪傑と稱せられるものは、唯強いばかりの人では
ない。その剛強な一面と、その赫々たる勲業の表とを見れば
かりでは眞の英雄の面目を知つたといふことは出来ない。
次の二つの事蹟は、これをよく事實の上に證明したものである
あるまいか。

上杉謙信が、或夜石坂檢校に平家を語りせて聞いた。鶴の
段に至つた時、謙信は頻りに落涙した。側の者共が、かゝる勇
ましい物語を聽いて泣かれるのは如何したわけだらうと異
しみ思ふ様であつたので、謙信は、あゝ、我が國の武術も衰へた。
残念な事だ。昔、鳥羽院の御時、禁中に妖怪が出た事があつた。
八幡太郎が庭上で鳴弦をして、鎮守府將軍源義家と名宣りを
あげた所が、妖怪は忽ち消えたと傳へてゐる。その後、源頼政
は鶴を射落したに死ななかつたので、猪俣太がこれを刺して
殺したといふではないか。義家の鳴弦をなしたのは天仁元
年の事で、鶴の出たのは近衛院の仁平三年であるから、僅かに
四十六年の違であるのに、武徳は斯うも甚だしく劣つて居る。
今は頼政の時かり四百五十年は経つてゐるのであるから、自
分の武も亦遙かに頼政に劣つて居ることでありうと思つて、
覺えず落涙した。と語つたといふ。

これとよく似た話がある。相州北條の幕下で、佐野の城主を
した天徳寺といふ勇將があつた。或時琵琶法師に平家を語
りせて聞いた事があつた。豫めおれは哀な事が聴きたいか
ら、その積りで語れと言つて置いた。法師は承知致したとい
つて、やがて佐々木高綱が宇治川の先陣をした條を語り出し
た。すると、曲半ばに天徳寺は雨粟と涙を流して聴いてゐた。
夫が終つてから、今一曲前のやうにあはれな事を聴かせよと
注文したので、法師は那須與一が屋島の戦場に扇の的を射る
條を語つた。やはり半ば頃になると、天徳寺はし切りに泣い
てゐた。

其の後、數日経つてから、天徳寺は側近の者に、「この間の琵琶
はどう聴いたか」と問うた。一同は「まことに面白く覚えまし
た。が、唯一つ心得ぬことがございました。それは、二曲ともに
武者の勇氣・功名の物語であはれな事は少しもございません

のに、君には感涙に咽せんでおいでになつたやうに見受けま
した。之を聞いた天徳寺は驚いて、「只今までは各々を頼もしく
思つてゐたが、今の一言を聞いて力落したぞ。先づよく佐々
木が事を心に浮かべて見よ。右大將が御舎弟の蒲冠者にす
り賜はらず、寵臣の梶原にも賜はりなかつた程の名馬生食を
載いて出陣したではないか。そのかひもなく、宇治川の先陣
を人に譲つたり、必ず討死して、再び御目には懸りぬと申して
暇乞して鎌倉を立つてゐるではないか。彼が當時の心を思
へば、哀でないことがどうもてありう」と語つて、また涙を拭つ
た。

暫くして、また那須與一にしても、人多き中から選ばれて唯
一騎陣頭に出てから、馬を海中に乗入れた的に向かふに至る
まで、源平の兩陣は鳴りを静めて之を見物したといふ。若し
射損じたり、味方の名折れ、馬上に腹を切つてしまはうと思ひ

定めたる覺悟を察して見よ。弓矢執る身ほど衰な者はあるまい。自分はいつても戦場に臨んでは、この高綱や宗高が心で槍を執つて居るので、彼の平家を聽いては、我が心中に引較べて、覺えず落涙したのであるぞよ。先刻の言葉の様子では、各の武はたゞ一旦の勇氣に任せるもので、眞實の心から出るものではないらしい。それではどうも頼もしくない。といつて歎息したといふ。

謙信といひ、天徳寺といひ、唯事柄の表面のみを見ないで、その裏面までも察し、又唯他人の事と聞かずして、自分の心を推して他人の胸の中に入れて、その胸底の秘を讀んで眞によく他を理解し同情した心は、誠に尊いものである。斯うした温かな心があり同情があればこそ、多くの家來をも懐けたのである。半面に斯うした慈母の如き心のあるのが、眞に英雄たる所だといつても敢へて過言ではあるまい。

一二 怠りずゆかは

三浦梅園

三浦梅園
名は晉。儒者。
豊後國(天分縣)
の人。寛政元年
(一四九)歿、年
六十七。

今の人或は學に志し、或は藝に志すもの、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉め勵むと雖も、己に一月を経、半月を過ぎ、怠る心早く生じわがつとめ至らざるとはいはで、性質の過に委す。馬は疾しとて朝暫く走りて止まんにか、牛の終日ありかんに及ぶべき。谷間の石の磨かれ、井げたの圓くなるも、豈一朝一夕の力なりんや。今日止まず、明日止まず、今年止まず、明年止まず、而して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用ふるさへ、なほその與義に到るは易からず。况やわが一月半月乃至一年半年の勤を以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。

昔李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、途に老人の石にあてて斧を磨るに逢ふ。これを問へば、針と爲すべし

李白
字は太白。支那
唐の大詩人。寶應
元年(西紀七六二)歿、
年六十二。
匡山
四川省に在る山。

とて磨る。といひけるに感じて、勉めて書を読み遂にその名を成せり。

小野道風は本朝名譽の能書なり。若かりし時手を學べども進まざるに倦みて、後園にたちやすりひけるに、蛙の泉水の邊の枝垂れにる柳に飛び上りんとしけれども高く飛びて、後には遂に柳の屈かざりけるが、次第々々に枝に移りけり。道風これより藝の勉むるにあることを知り、學んでやまず、その名今に高くなりぬ。

(梅園叢書)

小野道風
日本三蹟の一人
醍醐・朱雀・村上
の三朝に仕へた。
康保三年(六六六)
歿、年七十一。

補充國語讀本 第二部

一 鳥飼藏人

五十嵐 力

奥州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或日、諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目にかゝりたたいと云つた。藏人はすぐに會つた。老僧は懇懇に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて、遠國から参つたもので御座る。近頃不疑なる御願ながら、生涯の思ひ出に貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが叶ひますまいか。」

と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて、弓場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

五十嵐力
文學者
文學博士
早稲田大學教授
山形縣の人

「では拙い藝を御覽下さい。」
 と云つて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみくくと
 水をついで、左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に二
 の矢が繼ぎ、三の矢が繼ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼い
 た。前の矢の筈に後の矢の鏃が相接して、數本の矢が只もう
 一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働の中に在つ
 て、藏人の身體は造り据ゑに石像のやうに泰然として、臂の上
 の茶碗の水はさゞ波に立たなかつた。一々の矢が的の正
 鵠を射たことはいふまでもない。

老僧は感嘆して、「あ」と云つたが、やがてつぶやいて、
 「かしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」
 と云つた。藏人は聞答めて、
 「御僧何と仰しやりました。」
 と尋ねた。老僧は

「いや、詞で御答は出来ませぬ。拙僧と一緒に山へ御出で下
 さい。」

と云つて、先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。
 二人は遂に高い山の絶壁に攀登つた。斷崖は一面に苔蒸
 して、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が
 泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじ
 て爪先を托するに足るだけのある。

老僧は先に立つて悠然として藏人を麾いた。見れば藏人
 は色が青ざめ、足がふるへ、そして冷汗は衣をしぼつて、踵まで
 濕つて居る。老僧は云つた。

「足がかりは此の通りの大磐石で、向ふには松が枝に鳶がと
 まつてゐて、魚類の的で御座る。さあ、御弓勢を御示し下さ
 い。」

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は我を去り天地に同じて、どのやうな高い山
 深い淵に臨まうとも神氣の變るものではない。然るにお
 ことは前には誇の色がありそして今はおどくして居り
 れるではないか。まだ一奮發を要しませうぞ。」
 藏人は我慢の夢を覺して、再び懸命の修行をした。そして
 遂に驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

（甲鳥園隨筆）

二 専心

北原 白秋

北原白秋
 詩人
 名は隆吉
 福岡縣の人

麝香の鑑定をする支那人の話がおもしろい。
 それは神業に近い。殆ど妙諦に入つてゐるのである。
 一體麝香といふものは、麝香鹿の腹中の囊に入つてゐるので、
 その入つたまゝの囊を圓く剥抜いて、麝香商のところへ賣り

に来る。それが高價なところから賣る方でも此の頃はいよ
 いよ狡くなつて、その中に鉛を入れて知りぬ顔で持つて来る
 といふのである。其の鉛の入れ方もいよ／＼巧妙になつて
 来て、たゞ天秤にかけただけでは、其の重さといひ、香といひ、色
 艶といひ、真正銘の麝香と寸分も見わけがつかない。そこ
 で麝香商の店にもその鑑定をする男を一人必ず雇ひ入れて
 あるさうである。その鑑定の仕方が又悠長なものである。
 その男は一方の掌の上に本物の麝香を載せ、一方の掌に新し
 いのを載せると、両手をかたみかはりにゆつくりと上げ下げ
 してゐる。たゞそれだけで、その両方の重さを掌の中で上げ
 下げしながら量つてゐる。さうして、それが本物かいかさま
 物か、いよ／＼どちりかに分るまでは、一時間でも二時間でも、
 半日でも一日でも、両手をたゞ上げ下げしてゐる。
 時とすると、掌の上の麝香を入れ換へて見たり、又元の掌に

移して見たりしては、たゞ上げ下げしてゐる。全く氣の長い話であるが、それでちやんとわかつて了ふから驚く。そこでいよ／＼怪しいときめて了ふと、いきなり鋭い小刀を執つて、ぐいと其の囊の中へ突込んで、きり／＼と割ると、ぽんと鉛をはふり出して了ふ。其の鑑定が、又千に一つの外札はないといふのだから、猶更驚くのである。

其の掌の上の觸感の微妙繊細な事は、たゞその事ばかりを鍛へ抜いたお蔭とはいへ、全く技神に入るといつていい。實に驚くべき一種の靈覺である。

由來支那人といへば、流石に大陸の人間だけあつて、よろづ大まかで、如何にもものろくさしてゐるが、その專問的な事にかけると、全く小賢しい人などの思ひも、寄りぬ妙技を發揮する。これは専心鍛練の結果で、何事もそのねんばり強い執着と大愚に近いまでの氣長な修道心とから、遂には人間以上の不可

思議力を持つまで、に達するのである。

金銀の鑑定なども、それは鋭いものだといふ。掌の上に金貨銀貨を一杯取りまぜて載せると、その五本の指先から一つづつ面白いほど、速く落して行く。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて、一つ一つ落ちかゝるところを、怪しいと見るとちいんと弾き飛ばして了ふ。それも千に一つの間違もないといふのだから驚く。これなどは全く指先の感じから、落ちかゝるとすぐ直覺して了ふのである。

それでは、かしい事には、さういふ麝香や金銀の鑑定をする男は、たゞそれだけのもので、世の中の事も知らなければ、何一つ他の事は出来ないで、その事以外には、たゞのろ／＼と遊びほうけてゐるばかりだといふ話である。だゞ一日中御馳走を食べて、掌を上げ下げしたり、鐵の棒でちいんとやるだけださうである。

料理屋の女中なども、馴れた事にはなかく、目はしがきく耳が聴い。

私が或時、割箸を割損ねて、ぼきりと音を立てた。それは傍に居る人でも、気がつかないくらい、幽かな音に過ぎなかつた。それに驚いた事には、その時、座を立つて既に次の部屋の梯子段のところまで行つてゐた女中が、はつと向きなほると、「お箸が折れましたの、相済みません、只今すぐに持つてまいります。」といつた。それはこまかなものである。

人は、目に物を見ながら頭に入れてゐない事が多い。私が筋肉炎のため、かなりなひどい手術を受けて、長い事下町の或病院に入つてゐた時の話である。窓の前の中庭には、檜の木と榎の木とが二本あつて、その間に青い物干竿が一本掛渡してあつた。いつもその方ばかり眺めてゐたので、それが目につかなかつたわけはない。それが驚いたことには

五十日あまりといふもの、全く頭の中に入つてゐなかつたのである。或る日、雨がびしょ／＼降つて、非常に陰氣な午後があつた。背中の創の痕が、その日は取分けてきり／＼痛む。あゝ痛い、あゝ痛い、あゝ／＼と思つて庭の方を見てゐるうちに、その青い竿がはつきりと目に見えて来た。おや、あんな竹竿があつたのかと思つて、私は思はず目を見張つたが、五十日の餘も、それを見てゐながら少しも気がつかなかつた自分の迂濶さ加減には、猶更吃驚して了つたのである。情ないことだと思ふ。つい目と鼻との間だ。いつも目に入つてゐたには違ない。それが見えなかつたのは、魂が入つてゐなかつたので、肝腎な頭がぼんやりしてゐたからである。身體がきりきり痛むので、魂が痛む、鋭くなる。そのはずみに目に入つた。そこで、やつと魂に焼きつけられたのである。青い竿が一本だ。

私達はいつも目に見たものを目ばかりでなく魂に徹して、その魂の眼でしつかと見届るだけの引締つた心で終始したものである。名人はまじろがず、そこに隙が一つあつてもいけないのである。

(洗心雜誌)

三 良夜

徳富 蘆花

良夜とは今宵なりん。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く風涼し。

夜業の筆を擱き、枝折戸あけて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木眞黒に茂る邊に出でぬ。其の蔭にひそめる井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲蟋々、時々、白銀の雫のぼた

りと落つるは、誰が水を汲みて去りしにや。

更に行きて畑の中にたゞずむ。月は今彼方の大竹藪を離れて、清光洛々として上天下地をひたし、身は水中に立つの思あり。星の光何ぞ薄き。氷川の森も淡くして煙と見ゆめり。静かに立ちてあれば、吾が側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青光りに光り、棕櫚はさやくと月に囁く。蟲の音滋き草を踏めば、月影爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。藪の邊には頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等もえ眠りぬなるべし。

開けたる所は月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を返して、木陰を過ぐるに、燈火のかげ木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

枝折戸閉がて、縁に踞する程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。

徳富蘆花
名は健次郎
文學子者
熊本縣の人
昭和三年歿
年六十

月は一庭の樹を照らし、樹は一庭の影を落し、影と光と黑白斑々として庭に滿つ。縁に大なる楓の如き影あり、八つ手の落せるなり。月光其の滑かなる葉の面に落ちて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、其の上にまに黒き斑點ありてちりちり躍れり。李樹の影の映れるなり。
月より流るゝ風梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と相抱いて跳り、白ゆりぎ黒さゞめきて、其の中を歩するの身は、この無熱池の藻の間に遊ぶの魚にありざるかを疑ふ。(自然と生)

四 川中島の戦

一、謙信の義氣

天文二十二年村上義清等信濃より采り投じ、請ひて謙信に

川中島 信濃國。千曲川と犀川との中洲の橋。

謙信 上杉氏。もと長尾氏。初名景虎。輝虎と改む。謙信はその法号。北越を討平して関東管領となる。從四位彈正左衛門とす。明治四十二年贈從二位(三十九年—二二三年)

義清

從四位下左衛門佐。信濃東南部を領す。屢々武田氏と戦ふ。(二一六年—二二三年)

信玄

名は晴信。信玄はその法号。甲信を奄有し、屢々北條上杉徳川の諸氏と戦ふ。從五位大膳大夫。(二一八年—二二三年)

今川氏

義元。兩宮の渡。信濃埴科郡。山本晴行。名は勘助。將おて

請し、いひて曰はく、僕等武田信玄の侵掠する所となり、身を容るるに地なし。側かに公の威名を聞けり。願くは一たび手を下し、救援し給へど。謙信曰はく、諸君豈人の下たるものなりんや。然るに來りて我に託す。これ我を知れるなり。我今ほぼ内亂を定む。念ふに賀越はわが父の讐なり。常にこの二國を屠りて遂に幟を京畿に樹てんと欲す。これわが素志のみ。然りと雖も、我を知るものに遇ひて、而して爲に力を出さざるは丈夫にありざるなりと。乃ち令を國內に下し、八千騎を將ゐて信濃に入り、十一月朔進みて川中島に陣す。信玄これを知り、援を今川氏に請ひ、歩騎二萬を將ゐて兩宮の渡に出で、山本晴行等をしてこれを覘はしむ。返り報じて曰はく、珂軍銳きこと甚し。君宜しく厚くその陣を集め、戦はずしてこれを屈すべしと。信玄これに従ふ。兩軍水を交みて陣す。謙信戦を挑めども信玄出でず。相

獨一独

持すること二十七日、謙信使者を遣はし、いましめて曰はく、「我聞く、公の兵を用ゐるは嚮ふ所留陣なしと。然るに何ぞ獨り我と決せざるか。我の公に於ける怨仇あるにありず。たゞ義清輩の爲にするのみ。敢へて問ふ。公何を以て彼の地を奪へる。公我と戦ふことを欲せざらば則ち地を彼に還せ、地を還すを欲せざらば則ち我と戦へ」と。信玄答へて曰はく、「公の義清を庇ふは眞に高義なり。然りと雖も晴信にして未だ死せざれば、公志を成すこと能はず。公戦はんと欲せば則ち公より始めよ」と。謙信曰はく、「諾」と。乃ち議を決し、詰朝會戦せんことを約し、即夜傳發し、五隊を以て合して圓陣となし、平明橋を渡りて進む。信玄十四隊を勅して迎へ戦ふ。卯より未に至るまで、橋を争ひて相逐ひ、勝敗決せず。謙信兵を分ちて上流を渡り、甲斐の軍後に出づ。甲斐の軍これを見、退き去る。横田源助、板垣三郎及び駿河の七將皆死す。而して

卯 午前六時

未 午後二時

駿河の七將
今川氏の援軍

越後の兵も亦死傷多く、兵を引ききて歸れり

ニ 太刀麾扇

二十三年八月、謙信また八千騎を以て信濃に入る。曰はく、「我この行必ず信玄と親ら戦ひ、雌雄を決せんと。進みて犀川を渡りて陣す。既望信玄二萬人を以て出でてこれと對し、壘を固くして出でず。間日謙信村上義清等をして夜兵を伏せ、曉に采樵者を出して甲斐の壘に近づかしむ。甲斐の兵出でてこれを追ひ伏に陥りて皆死す。諸隊隨ひて出で、乃ち大いに戦ふ。終日十七合、迭に勝敗あり。」

信玄潛かに令を下し、紐を犀川に張りて而して渡り、旗幟を伏せ、蘆葦の中を徑して直に謙信の麾下を襲ふ。麾下潰走す。信玄勝に乗じて進む。宇佐美定行等手兵を以て横に撃ちてこれを破り、これを河に擠す。信玄數十騎と走る。一騎あり、黄襖にして、騮馬、白布を以て面を裏み、大刀を抜き

犀川
松本平より來り
善光寺平を流
れ、千曲川と會
す。

宇佐美定行
越後方の老將
乘一乘

をる(折る)

て來り呼びて曰はく「信玄いづくに在るか」と。信玄馬を躍りして河を亂り、まさに逃れんとす。罵りて曰はく「豎子ここにあるか」と。刀を舉げてこれを撃つ。信玄刀を抜くに暇ありず。持つ所の巻扇を以てこれを扞ぐ。扇折る。又撃ちてその肩を斫る。甲斐の從士これを救はんと欲すれども、水駛くして近づくべからず。隊將原大隅、槍もてその騎を刺す。中りず。槍を舉げてこれを打ち、馬首に中つ。馬驚き跳つて湍中に入り、信玄縋かに免る。武田信繁、信玄の危きを聞きて、これに返し、騎を呼びて戦を索め、戦ひてこれに死す。この日、兩軍の死傷大いに當れり。而して信玄創を被り、夜兵を收めて退く。後、越後の捕虜を獲たるに、いふ「嚮の騎は乃ち謙信なり」と。

(頼山陽—日本外史)

信繁
信玄の弟。

島崎藤村
名は春樹。詩人、
小説家。長野縣
の人。明治五年
生。

五 落葉

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ來る冬、淺々としに感じの好い都會の霜、さういふものを見なれて居る君に、この山の上の霜をお目にかけた。この桑畑へ三度か四度もあの霜が來て見給へ。桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうになる。畠の上はぼろ／＼に爛れて了ふ——見ても恐しい。猛烈な冬の威力を示すものはあの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔かい。降り積る雪はむしろ平和な感じを懐かせる。十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜のために焼け損はれたり、縮水たりはしないが、朝日があたって來て霜のゆるむ頃には、重さ

に堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて茫然と眺めて居た位だ。そしてその朝は殊に烈しい霜の来たことを思つた。

二

十一月に入つて急に寒さを増した。三日の朝起き出で見ると、一面に霜が来て居て、桑畑も野菜畑も家々の屋根も、みな白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れるばかりであつた。すこしも風は無い。それで居て一葉二葉づつ静に地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀もいつもよりは高く勇しさうに聞えた。

空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた両手をかざしたくなつた。足袋をはいた爪先も寒くしみて、いかにも恐しい冬の道よつて来ることを感ぜた。この山の上に住む者は十一月

から翌年の三月まで殆ど五箇月の冬を過ぎねばならぬ。その永い冬籠りの用意をせねばならぬ。

三

木枯が吹いて来た。

十一月の中旬のことであつた。ある朝私は朝の押し寄せて来るやうな音に驚かされて眼が覺めた。空を通る風の音だ。時々それが静まつたかと思ふと、急に又吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向きの障子には、ぱり／＼と木の葉のあたる音がして、その間には千曲川の河音も、平素から見るとずっと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の隅までも舞ひ込んで来る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流のところに立つ柳などは、烈風に吹かれて髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑畑に茶褐色に残つた霜葉なども左右に吹き靡

千曲川
信濃川の上流、
長野縣を北方に
流れてゐる。

いて居た。

その日私は学校の往きと還りどに停車場前の通りを横ぎつて、眞綿帽子や、ふりんねるの布で頭を包んだ男だの、手拭を被つて両手を袖に隠した女だのの行き過ぎるのに遇つた。往來の人々は、いづれも鼻汁をすゝつたり、眼の縁を紅くしたり、或は涙を流したりして、顔色は白つぽく、頬、耳、鼻の先だけは赤くなつて、身を縮め、頭をかゞめて、寒さうに歩いた。風を後にした人は、飛ぶやうで、風に向つて行く人は、又、力を出して物を押すやうに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹きまくる光景は、凄じく、烈しく、又勇しくもあつた。

樹木といふ樹木の枝は、撓み、幹も動揺し、柳、竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に残つたのは、吹き落された。梅、李、櫻

櫛、銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。せして、そこそこ、に聚つた落葉が、風に吹かれては、舞ひ揚つた。急に山々の景色は、淋しく、明るくなつた。

(藤村讀本)

六 俳句評釋

春の水山なき國をながれけり。

蕪村

春の水は、温かげに見ゆる春季の水をいふ。川にても池にても海にても、何にても宜し。此處は川なるべし。春の川水の、廣き野を、未遠く流るるを見渡したる景色なり。山なき國とあるを、若し「廣き野原」とせば、いかに。目前の景色は、同じけれども、感じに非常なる違あるべし。山なき國の方遙かに、強き印象を與ふるが如し。舊派の人は、蕪村の句を好かぬども、この句は

蕪村 谷口氏名は眞、夜半亭、春屋等の別号あり。後醍醐天皇の御時、天明俳壇の巨擘にして又南宗畫の大家。天明三年十二月歿す。(二三三六年—二四四三年)

其角 櫻本氏。蕪門十哲の隨一。寶音

廣 寶井狂雷
堂字の號あり
近江堅田の人
江戸に住す
寶永四年二月歿
す(二三二年
一三三六七年)

それ等の人にも賞美せらる。

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春 其角

これは其角の最も特徴ある豪放なる句なり。江戸の繁栄を非常に誇大的に詠めるものなり。釣鐘は一度鑄造すれば十年も萬年もあるべき物なれば田舎などにては釣鐘を造ることは非常なる大事件なるが江戸はさる各かなる地にあらず釣鐘さへ毎日賣れぬ日はなしと、大言を吐きて他國者の膽を拉ぎたる句なり。釣鐘といふ物を取り合はせたるを勝れたる處とす。江戸の春は江戸の春景色にて、春は最も陽氣なる時候なればこの句柄に相應するなり。

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月 文 草

朧月夜に大原の景色を見れば、一面に打ち霞みてぼんやりとしたるに色も何もよく見えざれど、ちらちら蝶の舞小姿が見ゆるとなり。この句を師の色蕉が見て、成程、これは佳き句

大原
京都府長岡寺
文草
内藤氏。屋敷大
山候の世臣。蕉
門下哲の一人。
寶永元年十二月
歿す(二三二一
三三六四年)

伊勢、正國の祖。
松尾氏、名け宗
房、通稱忠左衛
門、桃青と號す。
伊賀上野の人。
江戸深川に住す。
北村香吟に學び、
西行の風を慕ひ、
元禄七年十月大坂
と歿す。(三三〇三
年—三三五四年)

最上川
山形縣にあり。
日本三急流の一。

その女
伊勢松阪の人。
岡西惟中の子。
芭蕉に學びて句
鏡と號す。

なるが如し。しかし蝶の舞小はいかがありん。夜蝶の出づることとは不自然にはありざるがといひけり。然るに作者の文草、現に大原を通りてこの景色を見たりといひければ、芭蕉が「果して然らば、この句は實に秀逸なり。佳句なり」と賞め稱へたりきといふ。夜蝶の出て舞小といふことが大原の所柄にかなひて、神韻縹渺の趣を成せるなり。

五月雨をあつめて早し最上川 芭 蕉

これも有名なる句なり。最上川は人も知る如く羽前を流るる大河なり。奥羽地方といふ時は、何となく寂びたる感じの浮ぶを覺ゆ。其處に五月雨の降りて、その五月雨を集めて早く流れたりといふに、すさまじき水勢の目に見えて莊嚴なる句となれるものなり。

負うた子に髪ながらる暑さ哉 其の女

暑き時に子を背負ふ只それのみにても、かくかく汗は流る

享保十年四月
歿す。(三三三三
年一三三三八年)

るをその子は背中にて色々悪戯して、髪のをいぢり居るなり。うるさしといふことに、暑しといふことを結び付けたるを手柄とす。その女は流石に女俳人として、如何にも女らしき所に著眼したるものなり。男にてはかかる句は成り難かりん。

あり海や佐渡によこたふ天の河の芭蕉
これは越後の國の海岸より佐渡の島を望みて詠めるなり。日本海が八朔頃のなりひとて、非常に荒く立ち騒ぎ、浪音鞆と聞え、銀河は横に佐渡の上を流れて見ゆといふ、極めて雄渾なる句なり。横たふの語破格なれども、俳家にては難とせぬなり。俳句の數は何千萬と數限なれども、莊嚴なる點にてこの句を超すものは恐らく一句も無かりん。海を詩題としたるは西人に多くあれど、かかる景色をかく簡単に叙したるは、これ亦無かるべし。

路問へば一里一里と秋のくれ

蓼太

蓼太
信濃の人、大屋
氏、通稱蓼太郎
雪中庵と號す。
天明七年九月歿
す。(三三七八年
一三四七年)

旅行する時は屢かかかる目に遭ふことあり。大分日暮にはなりたれど、いまだ目的地に達せず。殊に秋の夕暮は日の暮れやすきをや。心細き氣持を詠めるなり。一里一里との「と」の使ひ方に注意あるべし。容易にいひ難きことを能く簡単にいひ現したるものといふべし。行く秋や木ずゑにかかる鉦屑。鉦屑が木の先にかかりをるなり。それが風に吹かれて居る有様は如何にも物寂しきなり。行く秋の寂しさに如何にも旨く適ひたり。面白き所に著眼したるものといふべし。(沼波瓊意)

沼波瓊意
文學者、俳人。
名は武夫、名古屋市の人。第一高等學校教授。昭和二年七月歿す。(三五二七年一三五八年)

神に灯を上げて戻れば鹿の聲

子規

春日の社か何か、今しも神官が神の前に灯を上げて戻りつゝあると、うしろで鹿

の聲がしたといふのだ。これりの趣向は叙寫法さへ今少し研究されたりば、随分趣もあつたであらうが、正けて是れはといふ如き中七字では、見るみがあつて一向にふるつた所がない。この句は子規自らも、その際は神韻練野たるつもりであつたが、その實句柄が幼稚で、調子も整はぬと嘲つてゐるが、實際その通りである。

(内藤鳴雪)

七出郷

長谷川三葉亭

長谷川三葉亭
名は辰之助
愛知縣の人
文學者
明治四十二年
歿年四十八

いよ／＼出發の當日となつた。待ちに待つた其の日ではあるけれど、今となつてはどうかやう一日位は延ばしても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はずん／＼出來て、さて改めて父母と別れの杯の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつてついでほろりとした。母は固より泣いた。快活な父すら目出度い目出度いと言ひながら、頻りに咳をして涙をかんでゐた。

詠への俤が来る。性急の父が先づ狼狽して出して、座敷中を

うろ／＼しながら、それ風呂敷包を忘れるな、行李は好いか小さい方だぞ、こゝこ、蝙蝠傘は己が持つてつてやる。と固より見送つてくれる筈なので、自分も一臺の俤に乗りながら、何は載つたか、何は……それ、あの、何よ……とあせる程尚思ひ出せないで、何やら分りぬ手眞似をして、獨り無上に車上で騒ぐ。

母も門口まで送つて出た。いよ／＼俤が出ようとする時、母は悲しさにじつと私の面を視て、ぢや、お前ねえ、か、身體を……とまでは言ひ得たが、後が言へないで涙になつた。

私は故意と附元氣の高聲で、御機嫌よう！と一禮すると、俤が出たから、其の儘眞向になつて了つたが、何だか後髪を引かれるやうで、俤が横町を出離れる時、一寸後ろを振向いて見たり、母はまだ門前に悄然と立つてゐた。

道々も故意と平氣な顔をして、往來を眺めながら、つとめて心を紛らしてゐる中に、馴染の町を幾つも過ぎて、俤が停車場

に着いた。

まだ發車には餘程間があるのに、もう場内は一杯の人で、雑然と騒がしいので、父が又狼狽て出す。親しい友の誰彼も見送りに来てくれた。其の面を見ると、私は急に元氣づいて、いつになく盛に饒舌つた。何だか私の舉動に注目してゐるやうに思はれてなりなかつた。無論友達の家で立際に私の泣いたことを知る筈はないから……。

やがて發車の時刻になつて、汽車に乗込む。手持無沙汰な落着かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動き出して、父の眼をしょぼつかせた顔がちりりとして直ぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其の向ふの後向の二階家が走る、平家が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのがかしいと、それを見てゐる中に、眼界が豁然と明るく

なつて、田圃になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が、屋根は黒く、壁は白く、ごた／＼と塊つて見える向ふに、生まれて以來十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙かに森の中に聳えてゐる。あゝ家はあの下だ……と思ふ時、始めて故郷を離れることの心細さが身に染みて、悄然としたが悄然とする側から、妙に又氣が勇む。何だか籠のやうなせゝましい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臓の締るやうな氣もするが、又何處か暢びりと、急に背丈が延びたやうな氣もする。

かうした妙な心持になつて、心當に我が家の方角を見てゐると、忽ちはたと物に眼界を鎖された。見ると、汽車は截割つたやうに急な土手を行くのだ。

(平凡)

依田學海

名は朝宗
字は百川
下總佐倉の人
明治甲午年歿
年七十七

八 無手勝流

依田學海

塚原ト傳は常陸塚原の人なり。擊刺天下に妙なり。劍に
はりて諸州に周遊す。嘗て東歸するとき、近江を過ぎて、湖舟
に上れり。六七の客中に一士人、有るを見る。狀貌穉愚にし
て、鬚髯面を繞る。自ら謂ふ、武伎に精しく、天下に敵無し」と。
ト傳、膝を抱きて坐睡し、聽かざる者の如し。士睥睨して曰く、
「吾子亦刀を佩ぶ。盍ぞ一言せざる」と。ト傳徐ろに曰く、
「僕の伎は君と異なり。人に勝つことを求めず、敗れざらんことを
欲するのみ」と。士色を作して曰く、「子の術は何とか名づくる
と。曰く、無手勝流是なり」と。「佩ぶる所は何の用ぞ」と。曰く、
「是私心を斷つなり。人を斬るに非ざるなり」と。士益怒りて
曰く、「子徒手我に敵するや」と。曰く、「可なり」と。士舟人を呼び
て岸を上りんとす。ト傳遙かに一洲を指して曰く、「岸上にて

格闘せば、或は人を傷つけん。請ふ彼に於てせん」と。乃ち舟
を命じて洲に近づかしむ。士躍起して陸に上り、劍を抜き、麾
きて曰く、「客來れ、客來れ」と。ト傳刀を脱して、之を舟人に付し、
其の棹を奪ひて一盪す。舟聞きて岸を去ること數丈なり。
大いに笑ひて曰く、「無手勝流とは是なり」と。

九 一の谷の戦

一 馬も四足

義経の鴨越に向ふや、路險しく夜黒し。辨慶をして嚮導を
索めしむ。辨慶火光を認め、一の人家を得たり。翁嫗の對坐
するを見て、告ぐるに故を以てす。翁曰はく、「小人獵を以て業
となし、山路を諳知す。然れども今老いたり。一兒あり、膽氣

一の谷
長津國、鐵柵林
伏の峯下の谷。
なほ二の谷の谷
あり。
鴨越
兵庫福原より
播磨にこゆる山
路。
辨慶
武藏坊。(一八
四九年)

通盛
教盛の子、越前守

用るるべしと。呼び起し、辨慶に従ひて義經に謁せしむ。義經火を執つてこれを視るに、長身高額にして、獵弓矢を持てり。その齒を問へば曰はく「十」と。義經爲にこれに冠し、性命を命じて鷲尾經春といひ、鎧仗を給し、以て嚮導となす。問ひ「鶴越は如何と」。經春曰はく「甚だ險しくして人馬行くべかりず。たゞ鹿のみ能くこれを踰ゆ」と。義經曰はく「鹿も四足馬も四足等しきのみ」と、衆に先だちてこれに馳す。

鶴越に至れば則ち天明けたり。俯して城中を視れば、二門の戦方に酣なり。義經急にこれに應せんと欲す。然れども懸崖數百仞、經春のいふ所の如し。衆相目し、敢へて進むもの無し。乃ち試みに鞍馬二を驅りて、これを下す。一は傷き一は達す。義經曰はく「下るべし」と。乃ちその騎る所の馬の後足を屈して、一鞭して下る。三千騎皆これに従ふ。胄鞍相觸れ、直に城後に達し、大いに呼んで入る。平氏の軍駭擾し、自り

重衡
平清盛の末子、左近中将、(一八二七年—一八四五年)

相撃刺し、教經等敗走す。義經火を縦ちてこれに乗ず。煙焰城に漲る。範頼實平、東西の門を破つて入り、三面より合撃して、平通盛等十人を斬り、平重衡を擒にす。宗盛乗輿を奉じ、海に航して逃る。衆舟に攀ぢて争ひ乗り、斷臂舟に滿ちたり。遂に讃岐に奔れり。(頼山陽—日本外史)

吉江高松
文學博士、早稲田大學子教授、長野縣の人、明治十三年生

早春
一 雲の夜

三月となつた。今降りずば時がないとのやうに大きな切れの雪が小止みなく降つて来る。雨が加はつた。風も出た。やがて雲となつた。地に落ちた雪は端からくく溶けてしまふ。道は一面

の深い泥窪地といふ窪地、溝といふ溝には泥水が溢れ出す。風がさあつと落ちると、其の泥水が動き出し、顛へるやうにして、道側の小川へ逃げ込まうとする。押し返される。逃げ場を失つて道一面にはひ廻る。風は一層強く、何處からか雨と雪とのありん限を送りつくして大地に打ちつけずば止まな。いかのやうに吹いて来る。――夜になると、風は少し穏やかになるが、それでも猶すぐ隣の寺の境内を立ち隠してゐる杉の防風林にぶつつかかる音がぐわうぐわうと響いてゐる。雨の音は四方に聞える。こんな夜は宏壯な構の家に住むよりは、手狭な小屋の方が一層楽しい。戸外で活動してゐる物皆の響がひし／＼胸に迫るやうで、障子一重直ぐ外からは、何處までとも知らず闇が続いて、其の闇の中を雨と雪とが音をたてて降つてゐるかと思ふと、不思議でたまらない。闇に取巻かれ、自然の樂に圍繞されてゐる一つ家だ。しかも其の闇も其の

物音も此の一つ家を壓しようとするのではない。燈火の明るいのにも響が通ふ。人の胸も、戸外の風雨にも皆若々しい調子がゆきわたつてゐる。楽しい夜だ。

二、若芽

三月の下旬、雨の細く降りそゞいでゐる日、丸の内、濠に沿うて歩いて行つた。立ち並ぶ柳は既に薄緑して、其の下を人は傘を肩にして歩いて行き、電車は輕げに走り過ぎる。何處ともなく「春」の氣合が現れてゐた。

ふと氣がついて見ると、電車の敷石の縁に沿ふて、若草の二葉が芽をふいてゐる。其の芽の緑が如何にも鮮やかで、元氣が籠つてゐる。若し雨が降り、風が吹いて、電車の通行が十分も止つたなり、其の草の芽は長く伸びて、敷石の上を覆ひ隠さう。其の割目からは根が張つて、石をば碎き果てもしよう。怖い力が二葉の中に包まれてゐる。

ニコライ塔
東京市神田区に
在る教會堂の
塔。

頂一頂

生ひ

載一載

實に「春」ではないか。今まで北の方の一隅に蹲つてゐた雲の群は、日の光に強く照されて騒ぎ出し、ちぎれく〜に亂れて都の上を覆ひ浮浮焉としてニコライ塔の頂を掠めて飛び、帆檣のやうに群がり立つてゐる煙突の上を、鳶は輪を描いて舞つてゐる。風が吹くと、輕塵が擧る。車馬を驅つて日比谷の公園を廻る人も多くなつた。見たまへ、此の時都の中、到る處少しの空地でもあれば、春草が一面に生ひ出で、日毎人の踏まないことのない電車の路の縁にでさへ、土を破つて草の若芽は萌え出でるではないか。

人生「敗滅」の姿は「春」に於て窺はれる。人は誇りに勝者の冠を戴かうとしてゐる其の都會に、自然は尚も其の怖るべき力を示して人を嘲つてゐる。城は春にして草木が深い。けれども草の深いのは獨り古城の址のみでない。今若し命じて一月の間、車馬の通行を禁じ、人の往來を止め、各家戸を鎖し

大聖
釋迦を指す。
悟空
孫悟空、その小
説。西遊記に
出る猿。

て郊外地に立ち退いてゐたならば、其の結果はどのやうであらう。恐らく煉瓦を敷きつめた銀座の街頭も忽ち青草の原と化しはしまいか。怖しい自然の力よ。勝者と自信してゐる人類も、畢竟大聖の掌上に踊つてゐた悟空のやうに、やがて此の力に壓倒される運命を持つてゐるのではなからうか。私は自分で胸に描いた自然の力の怖しさを目前に見るやうな氣がして、様々な空想に耽りながら濠洲に沿うて歩いて行つた

(綠雲)

見^ス

まづ

ある

覺^一覚

い^ハか

かうして

悔^ハゆる

徳川頼宣

家康の第十子
紀州藩祖。官權
大納言に在り、
寛文十一年正月
薨す。(二二六
年)——二二二
年

頼山陽

名は東、通稱
久太郎、安藝の
人。漢學者。
最も史筆に長
ず。天保三年
九月歿す。
(二四〇年—
二四九年)

歡^一欲

つた世の中が見えてくる。

そこでまづどうしてこの世に立つて往かうかと考へる。何になり何をしたりよいか自分の性質は果してどんな仕事に適してゐるかなど考へる。また世の中の事に對して、善いか悪いかの分別もついてくる。ここに自己の修養の必要を感じ、志を立てなければならぬことを覺り、また自己の任務を知り、さてはこの社會國家を改善して往かうなどいふ大きな望も起す。

かうして、少年の心は人生の曙に目覺める。

「若い時は二度はない。全く二度はないから若い時に勉めなければ年寄つてから必ず悔ゆる時が来る。むかし徳川頼宣が大坂の役の初陣に戦功のないのを歎いた時或人が「御年少の御身は、今後幾度もよい機會がございませう」と慰めると、頼宣は怒つて「我が十四歳の時は再び来るか」といつた。また

頼山陽は、十二歳で立志論を作つて「男兒學ばざれば則ち己む學ばば則ちまさに群を超ゆべし」といつた。これ等は人生の曙に目覺めた實例であらう。

曙が爽快であるやうに、少年の心は爽快である。曙が多望であるやうに、少年は多望である。朝と晝とが曙についてくるやうに、最も威勢のいい青年時代、すべてが成熟する壯年時代が手をひろげて待つてゐる。何と少年の境涯は歡ばしい勇ましいことではないか。

一日の計は朝にあり。(月令廣義)

朝の一時は晩の二時に當る。(俚諺)

生涯の朝には働け。(ギリシヤ古諺)

早朝一時間損すれば、終日これを追はねばならぬ。(イギリス俚諺)

朝の時は黄金を含む。(ドイツ俚諺)

若い時の苦勞は買つてせよ。(俚諺)

島崎藤村
名は春樹、詩人、
小説家、長野縣
の人、明治五年
生。

二 うてや鼓

島崎藤村

うてや鼓の春の音、
雪にうもるゝ冬の日の、
かなしき夢はとざされて、
世は春の日とかはりけり、

ひけばこぞめの春霞、
かすみの幕をひきとちて、
花と花とをぬふ糸は、
けさもえいでしあをやなぎ、
霞のまくをひきあけて、
春をうかす小ことなかれ、

花さきにほふ蔭をこぞ、
春のうてなといふべけれ、

小蝶よ花にちはむれて、
優しき夢をみては舞ひ、
酔うて羽袖もひりくくと、
はるの姿をまひねかし。

緑のはねのうぐひすよ、
梅の花笠ぬひそへて、
ゆの静なる春の日の、
しらべを高く歌へかし。

(藤村詩集)

三 椰子の實

名も知らぬ遠き島より、
 流れ寄る椰子の實一つ。
 ふるさとの岸を離れて、
 なれはとも浪にいく月。
 もとの樹は生ひや茂れる、
 枝はなほ蔭をやなせる。
 われもまた渚を枕、
 ひとり身の浮寝の旅ぞ。
 實をとりて胸にあつれば、
 むらじなり流離の憂。

生ひや茂れる

日にか一歸らん

海の日の沈むを見れば、
 たざり落つ異郷の涙。
 思ひやる八重の潮路、
 いづれの日にか國に歸らん。

(島崎藤村—藤村詩集)

四 眞田幸村父子

大阪夏の役、天王寺口の戦に、眞田幸昌敵と組討して取りたる首を鞍の四方手に附け、負うたる傷より流るゝ血しほ拭ひもあへず馳せ歸る。毛利豊前守勝永・榎島玄蕃允昭光、幸昌が傍に立寄り、扇を開きて打扇ぎつゝ、偕も偕もと大いに感じけ

天王寺口の戦
 元和元年(三三三)
 五月六日。
 眞田幸昌
 通稱大助。幸村
 の長子。元和元
 年(三三五)戦死
 年十六。

るに、父幸村も喜悅の笑を湛へて、手は淺きか。」と尋ねければ、幸昌は「薄手にて候。」と答へたり。

明くる七日、和議の將に成りんとするを聞き、幸村陣より幸昌を城内に返さんとて、近く之を呼び、汝、左衛門が子たる故を以て、諸將と肩を比べて采配を取ること、身の面目に非ずや。父は今日討死と思ひ定められたれば、今生の名残に父をよく見覺えて、更に悲しみ歎くことあるべからず。此の軍いよく味方敗北して、秀頼公御自害ありば、其の方も直ちに腹掻き切つて死出の御供申すべし。命助かりんとて、必ず降人などに出で父の名を汚すべからず。若し又、秀頼公此の度の死を遁れ給はば、假令何れも自害に及ぶとも、其の方は命を全くして、下人一人にても生き残りたる者ありば、扶持し召し連れて、秀頼公を守護し申すべし。くれぐれも父が武勇の名を汚すことあるべからず。是、子に在る者の孝行の第一。親の志を繼ぐこ

文法

之を呼び

此の軍

其が

是

ぞ思養なれ。早々城内へ罷り歸へ。」とぞ言ひける。

幸昌父が詞を聞く中より、落涙袖を絞りけるが、やうやうに歎きを止め、情なき仰せかな。討死と思し召し定め給ひなば、大助にもともに討死仕れとこそあるべきに、いかでさは宣ひぞや。秀頼公を見立て申す事、忠義に候はば、父上其の任に當り給ひてこそ、かひはあるべけれ。然るに父上は討死ありて、弱年の某に罷り歸れとの儀、心得難く候。關東勢の中には、伯父伊豆守殿を始め、一族の人人もおはし候へば、父が討死に、忪の大助は何とて一緒にありざるぞや。父を棄てて、臍甲斐なくも陣屋より城内へ遁れ歸りしか。』など嘲り給はん。他人はさておき、一族親戚への面目甚だ以て立ち難し。秀頼公を御見立て申さんは、御譜策の人々多ければ、大助が罷り歸るにも及び候はず。又、去年母上に別れ奉りし後、御文の便りに、生きながらへて相見んは願はしけれども、萬一の際には必ず父上

伊豆守
眞田信幸、幸
村の兄、萬治元
年(三三〇)年、
年九十三。

と同じ枕に討死せよ。かりそめの名こそ惜しけれ。』と誠め給ひしこともあれば、くれぐれも御免下さるべし。御一緒に今日の軍に罷り立ち、せめて雑兵の二三騎も討ち取り、其の後腹掻き切つて、黄泉の御供仕らん。』と言ひ切つて、歸るべき氣色は見えざりけり。

幸村も心強くは言ひけれども、今は落涙に及びつゝ、いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら、父と一緒に討死すること忠義の道に叶はず。長く命を全くせよといふには非ず、今日は命ながらへて明日にてもあれば、秀頼公御自害の砌、潔く腹掻き切つて、泉下に再會を期すべし。今日の御和睦御相談の事、其の實否知れ難し。さればとて、其の成り行きを見定めんとて、左衛門程の者が出陣の馬を無下に城へは返されじ。又戦を猶豫し、形勢を窺ふ様子見えなば、必定味方の士氣も衰へぬべし。さるによりて、我はこれより引返すことなり難し。あ

れは世の人の願ふ命二つ持てるこそ、今の我が身の幸なれ。二つの命を君に捧げて、一つは今日討死して、武名を揚げ、今一つは城内へ歸つて、今日明日の體を見届けんとは思ふなり。汝が命は、くれぐれも汝が命にあらざり、父が命なれば、父が心に任せ、早々罷り歸りて、秀頼公の先途を見届け奉るべし。』と詞を盡して、教訓しけり。

幸昌やうく、に聞き入れて、然らば御暇申して城内に罷り歸り申すべし。愈、今日討死と思し召し定められしや。』と又父が顔を守り見て、涙に打沈む。幸村詞を荒げ、親子の名残何時まで惜しみたればとて、盡る期あるべしや。』左衛門が子の大助、父と引分れて、城中に歸り、秀頼公の御生害の際まで附き従ひたり。』といはれんこと、後代までの譽、餘人の及ぶべきにありず。早々罷り立てよ。』と言ふ。幸昌、成程仰せにてこそ候へ。父上の御名を預りし此の身世に大切に候へば、寄手の追ひ付

言ふ
定む
衰ふ
捧ぐ
沈む

文法

かぬ内に御暇申さん。」と、心強く思ひ切つて父が前をば立ち出で、馬に乗るべき體に見えけるが、猶も父が方を見遣りて佇むを、幸村近習の者を以て、急ぎ罷り越すべき由催促しければ、せんかたなくも乗り出し、幾度ともなく父が方を見返りつゝ、やう／＼坂を下りて城内に歸りたり。

(名將言行録)

芥川龍之介

文學子者

東京市京橋區

に生る

昭和二年歿

年三十六

大川端

隅田河岸

五大川の水

芥川龍之介

自分は、大川端に近い町に生れた。家を出て若葉に掩はれ、黒堀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの幅の廣い川筋の見渡される百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から中學を卒業するまで、自分は殆んど毎日かやうに、あの川を見た。

水と、船と、橋と、砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮してゐる、慌しい人々の生活とを見た。眞夏の日の午すぎ、燻けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともない嗅いだ河の水のほひも、今では年と共に、親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分は、どうしてかうも、あの川を愛するのか、あのどちらかと言へば、泥濁りのした大川の生温かい水に、限りない床しさを感ずるのか。自分ながらも、少しく其の説明に苦しまずにはゐられない。たゞ、自分は、むかしから、あの水を見る毎に、何となく、涙を落した、いやうな、云ひがたい慰安と寂寥とを感じた。全く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國には、ひるやうな心持がした。此の心持のため、此の慰安と寂寥とを味はひ得るために、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の霧と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束奈い汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角船と、——すべて止み難い哀愁を喚び起す是等の川の眺は、如何に自分の幼い心を、其の岸に立つ楊柳の葉の如くをのゝかせたことでありう。

此の三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林のかげになつてゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶、月に二三度はあの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き流るゝともなく流れる大川の水の色は、靜寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、丁度長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさに融してゆく。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出来るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシヤが、初夏のやは

山の千
東京市の西北
寄りの一帯の
高臺。

らかな風に吹かれて、ほろ／＼と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒さうに鳴く千島の聲を聞いた。自分の見自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新にする。丁度夏川の水から生れる黒蜻蛉の羽のやうなをのゝき易い少年の心は、其の度ごとに新な驚異の眸を見はらずにはゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる黒い川を疑視めながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、如何に自分は、たよりのない淋しさに迫られたことでありう。

此の大川の水に愛撫される沿岸の町々は、皆自分に取つて忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形並木、藏前代地、柳橋、或は多田の藥師前、うめ堀、横網の川岸——何處でもよい。是等の町々を通る人の耳には、日を愛けた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家と

班女
 謡曲の一
 紫平
 姓は任原
 平城天皇の第三
 皇子阿保親王
 の第五子
 右近衛中将たり
 しを以て世に在
 五中將と稱せらる
 六歌仙の一人
 元慶四年薨
 年五十三

阿竹黙阿彌
 本名吉村芳三郎
 劇作家
 明治二十六年歿
 年七十八

の間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシマとの並樹の間から磨いた硝子板のやうに青く光る大川の水は、其の冷やかな潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる懐かしい響を傳へてくれるだらう。あゝ、其の水の聲のなつかしさと、つぐやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。班女と云ひ、業平と云ふ武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸浄瑠璃作者、近くは河竹黙阿彌翁が淺草寺の鐘の音と共に、其の殺し場の氣分を最も刀強く表はすために、屢々其の世話物の中に用ゐたものは、實に此の大川のさびしい水の響であつた。

殊に此の水の音を懐かしく聞く事の出来るのは、渡し船の中でありう。自分の記憶に誤がないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡し、の三つは、次第に一つづつ何時となく廢れて、今ではたゞ一の橋から須賀町へ渡る渡しと御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが昔のまゝに残つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流れも變り、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋められてしまつたが、此の二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のやうに青い河の水を、今も變りなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、此の渡し船に乗つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遅ければ、遅い程渡し船のさびしさとうれしさとがしみかゝと身にしみる。低い舷の外は直に緑色の滑かな水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、たゞ一目に見渡される。兩岸の家々はもう黄昏の鼠色に統一されて、其所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く霧の中に浮かんで

なく廢れて、今ではたゞ一の橋から須賀町へ渡る渡しと御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが昔のまゝに残つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流れも變り、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋められてしまつたが、此の二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のやうに青い河の水を、今も變りなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、此の渡し船に乗つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遅ければ、遅い程渡し船のさびしさとうれしさとがしみかゝと身にしみる。低い舷の外は直に緑色の滑かな水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、たゞ一目に見渡される。兩岸の家々はもう黄昏の鼠色に統一されて、其所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く霧の中に浮かんで

る。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張つた傳馬船が、一艘二艘と稀に川を上つて来るがどの船もひつせりと静まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分は何時にも此の静かな船の帆と、青く平に流れる潮のほひとに對して云ひやうのないさびしさを感ぜずにはゐられないのである。けれども、自分を魅するものは獨り大川の水の響ばかりではない。自分に取つては、此の川の水の光が殆ど何處にも見出し難い滑かさと暖かさとを持つてゐるやうに思はれるのである。

吾妻橋・厩橋・兩國橋の間、香油のやうな青い水が大きな橋臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは云ふまでもない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、静かに光りながら流れるのも、其の重々しい水の色に云ふ可からざる温情を載してゐる。

殊に日暮に、川の上に立ちこめる水蒸氣と次第に暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、殆ど比喻を絶した微妙な色調を帯びしめる。自分はひとり渡し船の舷に肘をついて、もう霧の下りかけた薄暮の川の水面を、何と云ふこともなく見渡しながら、其の暗緑色の水のあなた、暗い家々の立並んだ空に、大きな赤い月の出るのを見て思はず涙を流したのを、恐ろしく終世忘れることが出来ないのであらう。(大川の水抄)

六 落梅の音

薄田泣莖

今年、梅雨前には雨がひつきりなく降續いたが、肝腎の梅雨に入つてからは毎日の好天氣で、自分の住まつてゐる近く

薄田泣莖
名は淳介
詩人
岡山縣の人

の水田なども水不足で田植が延びがちになり、宵毎に聞く蛙の聲も何となく力がなかつたが六月も末になつてから雨は降出した。

初はしと／＼と降出した雨がやがて底を抜いた様な土砂降となりそれが二日も三日も四日も五日もどうかすると九日も十日も降續くと、天地は雨の光と影と響とに壓倒されて、草も木も鳥も獸も野も山もまた人間も、まるで小さな魚の様に押流されてしまひさうな危つかしい氣持を抱かされる。

この危つかしさを孕んでゐるのが梅雨の雨の特徴で、芭蕉のさみだれを集めて早し最上川

といふ句を讀んで岸を浸さんばかりの濁水が矢の様に早く走つてゐるのを想像して、眼がまひさうになるまでに水の力に驚くのも、この危さの氣持を感じるかりである。蕪村のさみだれや大河を前に家ニ軒

もまたこの危さの美を外にしては味は、れぬ句である。何時の年でも梅雨に入つて、土砂降の大雨に不安な危つかしさを抱かせられる度に、私は喩へ難い一種の快感を覚えぬわけにはゆかない。

幾日か降續いた雨がやがて降りくたびれた頃には、凡兆の言ふ。

この頃は小粒になりぬ五月雨

で、長雨と大雨との憂鬱と不安とから救ひ出された、激情の後のがつたりした疲かり産まれる明るさと言つた様なものが、分毎に、秒毎に度を加へてくるのも、かうした時である。

また降續き降暮した雨が、何時か夜になつて人の寢静まつた後にこつそり晴れて、それがちやうど月のある頃で、庭木の影が水の様に窓障子に浮んでゐるのを、ふと眼が覺めて見る驚きなども、梅雨でなくては得られぬ趣である。

月のない全くの闇の一夜、夜が更けて寝つかれないでゐると、さき方から降りほそつた雨は何時しか止んで草木といふ草木はしづくの垂れるぬれ髪を地べたに突伏したまゝ、起上る力もなく、へとくへになつてゐる静かさの底で、ほたりと何物か地べたに落ちるのを聞附ける事がよくある。熟梅の一つが枝を離れた音である。

私はどんな時でもこの音を聞附けると、梅の實が自分心の深みに落ちて来たかの様子を驚きと懐かしみとを感ずる。何一つ動かない閑寂その物の微かな溜息が、樹の枝を離れて真直に私の生命の波心にさゝやきに來た様な感じである。

(草木蟲魚)

七雨の趣味

寂しい(寂しき)

随つて(随ひて)

雨にはいろいろの種類がある。しとしとと降る春雨もある。氷ば、盆を覆すやうな夏の夕立もあり、寂し秋の雨もある。寒い冬を伴ふ時雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。さうして、その種類に随つてそれぞれ趣味を持つて居る。柳の若芽に煙るやうな春雨の長閑けさには、優しい女の趣があり、乾ききつた河原の石をも轉ばすばかり勢込んで降る夕立には、強い男の趣がある。然し、いづれにしても、雨は單獨には餘り趣のないもので、何か背景又は添物を得て始めて趣を生ずる。例へば、春雨ならば、柳の木があつて、其處を蛇の目の傘をさした人が通るとか、夏の夕立ならば向うに山があつて、手前に川があり、河原に急ぐ男が用意の蓑と笠とを取り出して走るとか、五月雨ならば、それのみづみづしい青葉に降り注ぐと

かいふやうに、柳、傘、山川、蓑、青葉などの背景や添物があつて、ここに始めて雨の趣味が発揮されるのである。

雨の趣味は動の趣味である。新緑などは全然静の趣味であり、花も落花の場合を除けば静の趣味であるが、雨はいくら静かに降つても動の趣味である。随つて時間的の趣味を持つて居る。花や新緑は一目見ればすぐその趣味が味はれるが、雨は少くとも數分間續けて見なければその趣味を味ふことは出来ぬ。夕立のやうな短時間の雨でも、やはりさうである。まして春雨、五月雨、秋雨などに至つては猶更のことで、數時間も降りつゞいて居る中におのづとその趣味が味はれるのである。

雨はもともと水滴であるから、花や青葉のやうに明瞭な形や色を持たぬ。その代りに、花や青葉の持たない所の音を持つて居る。花や青葉も風によつて多少の音を出すか、それは

寧ろ風の趣味で、花や青葉その物の趣味ではない。落花も落葉も詩に歌ふほど音のあるものではない。これに反して、雨は天空から降つて来て、必ず地上の何物かに當つて可なり高い音を立てる。そしてその音が雨の趣味の少からぬ部分を占めて居るのである。春夜部屋の中におゐて、しとしと降る雨の音を聞けば、少しも外を見ないでも、十分に春雨の趣味を味ふことが出来る。

戶外に居る時は別として、室内に居る場合には、誰しもまづ軒又は庭の木の葉に當る雨の音によつて雨の降り出したことを知り、その趣味を味ふものである。雨の程よい音を聞いて居ると、何となく落ち著いて、一種いふことの出来ない穩かな感情の起るもので、親しい友としんみり話す時などの情調に最もふさはしい。

雨の色は餘り趣味に關係しないが、雨によつて濕された色

程よい(程よき)

は甚だ趣味の深いものである。新緑なども雨に濡れると殊に光澤を増し、枝や幹も全く前と變つた佳い色となる。又石は雨に濡れて始めてその趣味を發揮するものである。随つて石燈籠や飛石は雨に濡れると非常に佳い色になる。土は石ほどではないが、乾いた時よりは雨に濡れた時の方が餘程趣が深い。然しこれ等は打水をしても同じやうになるから、殊更雨の趣味とはいへないが、雨に附隨した趣味としては主なものである。(黒田鵬心)

黒田鵬心
名は明信。美學者、東京帝國大學美術科出身、東京の人。明治十八年生まる。

ふる里の雨しづかなり母も吾も

悲しきことはけふは語らず 古泉千樹

降る雨のたかき響にこもりつゝ

遠音の蟬のしじにきこゆる 窪田空穂

八 瀑の音

鈴木鼓村

鈴木鼓村
音楽及び音楽史の研究者。琴の名手。

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは、あり瀑や満山の若葉皆振ふと云ふ小湫石の句である。如何にも鞆鞆たる瀑の音を聞くやうで、一種雄大な感に打たれる。

初給の軽い旅姿で喘ぎ／＼細い徑でも上つて往くと、しつとりした若葉の匂が鼻に満ちて来る。汗ばんだ肌も冷りとするので、「もう瀑に近づいたな。」と思ふと、どうつと雷のやうな音を連続させて、それが木立や巖石の疎密の加減で、強く聞えたり、また少し弱くなつたりして居るうちに、さつと薄い霧が面を拂つて、つひ數歩前に見上げる白簾が現れ、巖に激して、凄じい響を立てる。そのあたりの青葉若葉は揺ぐばかりである。崖の上には赤い躑躅が照つてゐる。薄紅の八汐の花

八汐
根の一種。春の間は赤甚だ紅に夏に入つて綠に變る。

が翠帯の中にぽつりぽつりと模様のやうに咲いてゐる。こんな光景が自ら想ひ起される。おなじ瀑の音でも、何處か閑寂な感じのするのは、彼の芭蕉翁の、

ほろ／＼と山吹散るか瀑の音
といふ句である。

春が段々開けて、山吹の花は瓣の端が白くなつて、風もないのにほろ／＼と散る。其處りに、餘り大きくない瀑があつて不絶の響を傳へてゐる。その裾には水車もありう、杉の林もありう。日は麗かに照つて、背中がほかほかするので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向うの山際で一聲朗らかに鳴く。またしても山吹がほろ／＼と散る。瀑は同じ調子で響いて居る。

翁の句はこんな境を聯想させる。

(耳の趣味)

辭一辯一粹

文法

開けて

傳へてゐる

かけてゐる

聯想一連絡

九川柳點

金子元臣

金子元臣

宮内省御歌防奇人。國學院大學教授。東京市の人。明治元年生。

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り滑稽頭を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑ありざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもありぬど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左に其の二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に来て、御慶帳の記名に困り「ざらば來ぬ分にしてお下され」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名利受を玄關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり訓誡ともなる。

おさへれば薄はたせばきりぐす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟渴虎ヲ取ル」と書きしを、いみじき手がりの様に驚ける人もしこの句を見れば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり。

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かぬ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてく」目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かぬ

蘇東坡
蘇軾。文學家。
詩人。支那
宋の人。

道灌
太田道灌。足利
時代の武將。文
明十八年(三四六
)歿。年五十五。

塙檢校
名は保己。國
傳子者。文政四年
(三四八)歿。年七
十六。

漢文に捨假名・反點の左右にうるさく附き纏へるさま、譬へ得て妙。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすりんをかしきよ。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しにお金配分を唱へし小野九太夫はこの露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事傳説・史實等を

小野九太夫
戯曲假名手本
忠臣藏中の入
物。

戸隠明神
長野縣戸隠山。
千力雄神を祀
る。

能因

歌僧。俗名橋永
愷。又古曾師入
道ともいつた。
後鳥羽天皇の御
の人。

袋草紙

四巻。藤原法親
の著。歌麿の書。

忠盛

平清盛の父。仁
平三年(八三三)
歿。年五十八。

隼太
頼政の御等諸
隼太

時致

曾我五郎のこと。
河津祐泰の子幼
名祐五郎。建久四
年(八五三)歿年
二十。

祐成

曾我十郎のこと。時
致の兄。幼名一萬。建久四
年(八五三)歿。
年二十二。

佐野

謡曲「録の木」に出
てある佐野源左
衛門赤世。
戸塚の阪
神奈川縣鎌倉郡
に在る。

題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に聞くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。鑷に髭ぬく、ひま人の所作を、神代に附會したる働きあり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦がして、顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目はこゝなり。但し袋草紙に、「二度においては實か。八十島の記を書けり」とあり、何時も室内旅行家にはあらざりけりし。

忠盛の高名の場を犬が嘗め

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽、突梯容易に及び易からず。

その暗き隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと、矢所ぎぢかならざ」とあり。乃ち、即等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあてて、まごゝする一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつけるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にし、大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を噛りせたるはこの作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入りの一難處。元來乗力なき源左が瘦馬さぞや、越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

道風 姓は小野。書家。三蹟の一人。康保三年(六二六)歿年七十一

文王 周の武王の父

太公望

呂尚といふ。支那國の文王、武王の功臣

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには平凡なりざるを得ず。たゞ「な」との話、胸に一物ある趣を状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

一〇 扇の的

さる程に、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵共あ
そこの嶺、この洞より、十四五騎二十騎うち連れうち連れ馳
せくる程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「今日は日暮

判官 源氏親のこと、頼朝の討た

れぬ。勝負を決すべからず」とて、源平互に引き退く處に、沖よ
り尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕ぎよせ、渚より七八
段許にもなりしかば、船を横様になす。あれはいかにと見る
處に、船の中より年の齡十八九許なる女房の柳の五衣に紅の
袴著たるが、皆紅の扇の日いだしたるを船のせがひに挟み立
て、陸に向ひてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、「あれ
はいかに」と宣へば、射よとにてこそ候ふらぬ。但大將の矢面
に進んで御覽せられむ處を、手だれにぬりうて射落せとの謀
とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候
ふらむと申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かあると問
ひ給へば、手だれども多う候ふ中に、下野國の住人那須太郎資
高が子に與一宗高こそ、小兵では候へども手は利いて候ふと
申す。判官、證據があるか。「さん候ふ。かけ鳥などを争うて、
三つに二つは必ず射落し候ふと申しければ、判官、さらば與一

呼べとて召されけり。
 與一その頃はいまだ二十ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以て袷、端袖いろへたる直垂に、萌黄威の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割り合はせて矧いだりける。ぬための鏑をぞさし添へたる。滋藤の弓脇に挟み、胄をば脱いで高紐に懸け、判官の御前に畏まる。判官「いかに與一。あの扇の真中射て敵に見物せさせよかし」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ附けりるべうもや候ふらむ」と申しければ、判官大いに怒つて、亭度錦倉を立つて西國へ向はむざる者共は、皆義經が下知を背くべからず。それにより少しも仔細を存せむ人人は、これよりとうとう錦倉へ歸るべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなむとや思ひけむ。候はば、外れむをば

存じ候はず。御談で候へば、仕つてこそ見候はめとて御前をまかり立ち、黒き馬の太う遅ましきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取り直し手綱かいくつて、汀へ向つてぞ歩ませける。身方の兵共、與一のうしろを遙かに見送つて、「この若者、一定仕らうずると覺え候ふ」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入つたりければ、なほ扇の間は七段ばかりもありむとこそ見えたりければ、頃は二月十八日酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりける。船はゆり上げゆり据魚漂へば、扇も串に定まりず閃いたり。澳には平家船を一面に竝べて見物す。陸には源氏轡を竝べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事なし。與一目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉

日光權現
 栃木縣日光山なるニ荒神社あり、事代主命を祀る。
 宇都宮
 同縣宇都宮なるニ荒神社。
 湯泉大明神
 同縣那須郡那須山にあり。

大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折自害して、人に二たび面を向くべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、この矢はづさせ給ふなと、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鎗を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鎗は浦響く程に長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎗は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれ、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日のかがかやくに、白波の上に乗ひ、浮きぬ沈みぬゆりれけるを、澳には平家舷をたたいて感じたり。陸には源氏舷をたたいてとよめきけり。

平家物語

二 希望

澤柳政太郎

希望は青年の生命なり。青年は人生の春なり。春日郊外に出でて山野に生立つ草木を見よ。露光うるはしく、百花英を含みて、何れも生氣に富めり。

青春の學生も亦然り。元氣旺盛にして前途の希望に充ち満てり。今日解せざることも明日は之を解し得るに至るべく、現に能くせざることも將に能くするに至るべき望あり。希望は力なり。人は此の力あるによりて活動し、又發展す。活動、進歩、發展は實に青年の特質なり。希望なき生活には活動なく、進歩なく、發展もなし。將來爲す有るの青年は希望に満てる青年なり。

何れの時代に於ても青年は洋々たる希望に富むものなれども、特に現代の青年に於て、其の然るものあるを見る。今や

澤柳政太郎
文學博士
貴族院議員
教育家
長野縣の人
昭和二年歿
年六十三

社會百般の事業は駸々乎として改善進歩の實を擧げつゝあり。而して是等の事象を更に一層發達せしむべき任務を負へるものは現代の青年なり。國家將來の興廢は一に現代青年の努力如何に由る。國家は政治に、實業に、科學に、藝術にはた軍事に、有爲なる青年の奮起、活動を待つこと極めて切なるものあり。此の世界を一層善美なる世界たらしむるもの亦青年を描いて他にあるなし。

大いに爲す所ありんとする青年は須らく快活なるべし。快活は心の快晴なり。其の心快晴なるときは、勇んで多くの困難にも打克つことを得ん。若し其の心鬱々として霖雨の霽れざるが如くば、意氣も銷沈して進歩の力も自ら萎むべし。一旦の蹉跎に失望落膽して、遂に憂鬱に陥り、此の世を果敢なむが如きは、人生の春と稱せらるゝ青年に似合はしかりず。人生の行路は始終平坦ならずして、時に崎嶇羊腸たることあり

備前侯
徳川綱吉の頃の
備前岡山の藩主
池田光政
熊澤蕃山
中江藤樹の門人

り又萬丈の絶壁前に横たはりて進むに道なきこともあるべし。されど前途に希望を有するものは、一難に遇ふ毎に益堅忍不拔の精神を奮ひ起し、所謂禍を轉じて福となすことも難からず。艱難人を玉にし、風雪を経て花笑ふ春に遇ふ。苦しきことも、我が力を鍛ふべき好機會なりと思はば、悲觀するの要なし。「天の將に大任を是の人に降さんとするや必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞らし、其の體膚を餓やし、其の身を空乏にす。」とは孟子の道破したる所なり。かの備前侯を輔けて偉業を成遂げたる能澤蕃山は「憂きことのなほこの上につもれかし、限ある身の力ためさん。」と詠みたり。失意落膽は、老い先短き老年者流の事なり。青年にして憂鬱悲觀に沈むものは、既に其の青年たる資格を失ひて老顏の列に伍するものといふべし。

人は其の才能の差異、家庭の事情等に制限せらるゝものな

れば、すべての人皆大事を爲し得べしとは云ふべからず。徒に過大の希望を懐くは、思慮あるものの爲すべきことにある。青年は動もすれば空想に耽けることあり。希望は如何に之を高所に置くとともに、自己の力にて到達し得らるべく、歩々接近せらるべきものなれども、空想は到底接近せらるべきものによりず。希望は必ず之を懐くべく、空想は然らず。

希望は如何にして達せらるべきか。希望は一躍して達せらるべきものにあらず、秩序的に歩武を進むることによりて達せらる。たとひ天才なればとて苟も秩序的に事を爲さざるものは、其の才能を十分に發揮する能はざるべし。希望は僥倖によりて達せられず、著實なる努力に由りて達せらる。現代の社會には人の耐倖心を挑發する傾向少からずと雖も、確實に希望を達せんと欲せば、決して是等の誘惑に心を奪はるべからず。希望は他人に頼りて達せらるべきものにあらず。

す。自己の力を恃みて邁進すべし。天は自ら助くるものを助け、天佑は天佑に値するもの獨り之を享く。希望は容易く達し得らるべしと思ふべからず。あらゆる困難に打勝つ覺悟を以て、根氣よく熱心に事に當るべし。一たび挫折するこゝとあるも、失望落膽せず、不撓不屈の精神を以て進まば、遂に希望を達成するに至るべし。

補充國語讀本 第四部

一 希望

佐賀
今の佐賀市
鍋島氏の城下
であつた。

藏家
土藏造の家
のこと。

佐賀の六座町の貧乏人の子供が三人ある時寄りあつて、しんみりと將來の事を話しあつた。お互に、未は何になるつもりかといふやうな事を。すると一人の小僧は、
「どうしても根かぎりかせぎだして、金持になり藏家の下にすまねばならぬ。」
といふ。と一人の八百屋の小僧はいふ、
「おれはやはり、一生天秤棒をかついで、八百物を賣りあるくより外はない。」

かざり屋
金銀細工をす
る家

と。ところが今一人はかざり屋の息子で、朝から晩まで銅板銅板をたいて、かちん／＼やつてゐる家の小僧であつたが、もぐ／＼して何もいはぬ。

これはふだんから性質が少し鈍い方で、仲間からはいくらか足りぬ人間とも見られてゐたのだ。そこで二人の小僧はそれに向つて、「お前は何になるつもりか。」ときいたり、握拳で大小をこしらへて、きつと身がまへ、「おれは侍になる。」といつた。すると二人はあきれかへつて、「やっぱり馬鹿は馬鹿だなあ。」と笑つたといふ。

ところがその生立を見ると不思議なもの、その一生の間に藏家蔵家の下に住みだす。といつた小僧は、果してその言葉どほりに成長して一人前になるに従つて、いよく／＼かせぎだして、わき目もふらぎずにかせぎ溜めて、とう／＼一代の間に望みどほりの藏家を建てて、自分は坐りながら安樂に暮せる身分になつた。

が今一人の小僧はと見ると、やはり一生天秤棒天秤棒がついで、毎日々々家々の勝手口から八百屋物の御用聞きにまはつてゐたといふ。さて残る一人のかざり屋の小僧はどうなつたかといふに、その後銅板たゝきをやめて、漢方醫の學僕に住みこんで見たが、とても澤山な漢字が覚えきれないので閉口した。時に、その頃、蘭方醫の島本龍洲といふ人がゐて、その話によると、蘭學といふものはやさしいので、字數がたつた二十六字、それをいろ／＼に組合せて讀むだけのことだといふ。そこで氣を變へて、漢方醫をやめて島本の學僕に住みかへた。このかざり屋の息子は、性質は鈍いやうだが根氣がよい。眼さへ醒めれば、二つ二つと勉強する。とう／＼二十六字から學び始めて、蘭學の方で成功して、あつぱれ一かどの蘭方醫となつた。それが山村良哲であつて、後には佐賀藩で厚生館厚生館を興して、醫學生を養成するに及んで、そこに抱へられて、兩刀を

佐賀藩
鶴島氏の藩。
三十五萬七千石
であつた。
厚生館
佐賀藩で立て
た醫師兼、成の
學校

蘭學寮、
オランダ語と西
洋の學問を教
へる學校

大隈重信

佐賀藩の士、
明治維新の時
功を立て、
その後政治教育
に力を尽くして早
稲田大學を立
内閣總理大臣と
なつた。侯爵。
大正十一年薨

相馬御風

名は昌治
文藝子者
新潟縣の人

帯び、蘭學寮の教授までも兼ねた。そこで幼友達の八百屋が
感心して、

「人間といふものは怖い者ですなあ。あの良哲がとうと
う侍になりをつた。」

といつたといふ話である。(大隈重信—早稲田講話の文による)

二 落葉する頃

相馬御風

一時雨來る毎に庭の木の葉が散つて行く。私はけふ此の
頃、この庭の木の葉の散つて行く風情を心ゆくばかり眺め樂
しんでゐる。春の芽吹き、初夏の若葉、眞夏の緑、秋のもみじ、
づれにもそれだけの風情はあるが、晩秋初冬の落葉の風情も
また格別である。常磐樹にもそれとしての獨特の風情はあ

るが私はそれよりも落葉樹の風情の方に一層複雑な味ひが
あるやうに思ふ。

木の葉が散る。しきりに散る。

同じく皆散つて行くのであるが風にあふられてあわただ
しく散つて行く葉もある。風もないのに静かに散り落ちる
葉もある。ひどい風が何度吹いて來ても強情にしがみつい
てなか／＼散らうとしない葉もある。

裏を見せ表を見せて散る紅葉

これは良寛和尚が最後の病床に横たはりながら幾度とな
く口ずさんだ句であるといふ。誰の作であるか、そのことは
良寛みづから語りなかつたといふがいかにもその句が自分
の辭世の言葉でもあるかのやうに幾度も幾度も微かに口
ずさんだらしい。その事は良寛和尚の最愛の弟子であつた
貞心尼の記録に書かれてゐる。

木の葉は散る。裏をも表をも安らかに見せながら木の葉は散る。冷たい大地の上へ……。

一 荒れごとに雪が里に近づいて来る。

二 三日前までは中腹あたりまでしか白くなつてゐなかつた山々が今日見るともう麓近くまで白くなつてゐる。

里に雪の来るのも遠くないでありう。此の二三日の雨の音を聞いただけでもそれが感じられる。まだ霽といふほどでもなく霰まじりといふほどでもないが、何となく雨の音が堅くなつた。

窓に吹きつける嵐の音のもの凄さ！

毎年いよく冬が来たと感じさせる寺々の報恩講の鐘の音を聞くのも、あともう三日だ。どの家でも眞剣に冬籠の支度を急いでゐる。

北國の冬は永い。殆ど四ヶ月の間雪に埋れて暮さなくて

にやりの

またその永い冬がやつて来つゝある。

ありしの前の静けさ。天も地も草も木もありゆるものが息をひそめて、不安のどん底に呆心してゐるやうなその静けさ。さうした自然の静けさに度々接するのも此の頃であるが、それと共にありしの後の静けさ、その何ともいへない快い天地の静けさを時々味はふことの出来るのも此の頃である。北國の冬の荒れは物凄。しかし、その物凄、暴風雪があるればこそ、そのあとの快い静けさを味はふことも出来るのだ。

庭の山茶花がまだ咲いてゐる。霽の感じに近い冷たい雨に濡れながら、いゝ色の花を咲かせてゐる。

この山茶花の咲いてゐるのを見ると、私はよく東京に住んでおいた頃の雑司ヶ谷あたりの初冬をおもひ出す。あのあた

りには垣根に山茶花の咲いてゐる家が多かつた。よく晴れた初冬の朝薄紅色の山茶花の散敷いた垣根沿ひの通りを歩いて勤めに出たことがふと思ひ出される。

しかし、こちらでは山茶花の咲く頃が最も雨が多し。ここでは此の花は冷い雨に濡れながら咲き且散る運命を負はさぬてゐる。

だが、何れにしても山茶花はさびしい花だ。葉の色も花の色もかなり鮮やがでありながら何となくさびしい花だ。

恩師島村抱月先生は此の花が最も好きであつた。私達は先生のお墓に此の木を澤山植ゑた。此の花は私に亡き先生をおもひ出させる。

木の葉がしきりに散る。

しかし、葉の散つた後を見るといづれの本も来年度の春にな

にさる

またその永い冬がやつて来つゝある。

ありしの前の静けさ。天も地も草も木もありゆるものが息をひそめて不安のどん底に呆心してゐるやうなその静けさ。さうした自然の静けさに度々接するの此の頃である。

がそれと共にありしの後の静けさ、その何ともいへない快い天地の静けさを時々味はふことの出来るのも此の頃である。北國の冬の荒れは物凄しい。しかしその物凄しい暴風雪があ

ればこそそのあとの快い静けさを味はふことも出来るのだ。庭の山茶花がまだ咲いてゐる。雲の感じに近い冷い雨に濡れながらいゝ色の花を咲かせてゐる。

この山茶花の咲いてゐるのを見ると、私けよく東京に住んでゐる頃の雑司ヶ谷あたりの初冬をおもひ出す。あのあた

りには垣根に山茶花の咲いてゐる家が多かつた。よく晴れた初冬の朝、薄紅色の山茶花の散敷いた垣根沿ひの通りを歩いて勤めに出たことがふと思ひ出される。

しかし、こちらでは山茶花の咲く頃が最も雨が多い。ここでは此の花は冷い雨に濡れながら咲き、且散る運命を負はさねてゐる。

だが、何れにしても山茶花はさびしい花だ。葉の色も、花の色も、かなり鮮やがでありながら、何となくさびしい花だ。

恩師島村抱月先生は此の花が最も好きであつた。私達は先生のお墓に此の木を澤山植ゑた。此の花は私に亡き先生をおもひ出させる。

木の葉がしきりに散る。

しかし、葉の散つた後を見ると、いづれの木も來年の春にな

つて芽吹くべき其の芽が堅い皮の下に用意されてゐる。

葉の落ちた後の木々の枝に、點々として小さな疣のやうに見えてゐる翌年の芽の用意を見ると、私は妙になつかしさを覚える。

夕焼空に描き出された冬枯の木のシルウエツトを見上げる感じも私は好きだ。

三 産土神と氏神

家が集まつて村をなし、郷をなす。そこには村社、郷社がある。ちやうど一家の中に神棚があると同じである。その神社を中心として、家々の祖先が和樂し、團結したやうに代々子

孫が和樂團結して行く。或は小高い岡の上に、或はよく耕されに田圃の間に、こんもりとした松杉などの木立に包まれたお宮がそれである。茂つた森の端に鳥居が見え、石燈籠の見える景色は、外國には決して見られない。我が國特殊の景色で、これが我が國特殊の歴史と國體とを語つてゐるものである。かういふ神社が産土の社である。子が生まれ、お宮参をするのは、この郷土の一家に、新しい小國民が生まれたことを産土神にお知らせするのである。産土神は郷土の守護神である。豊かな秋の實のりの後では、この守護神の境内や、その附近に宮相撲の行はれることもあり、村芝居の催されることもあつて、娯樂の中心地ともなる。神代の昔、天の岩戸の前で、神々達が神樂を催され、やうに、村人はここに集まつてお祭をするのである。大人も子供も、一緒になつて楽しむのである。

都會の大きな神社の祭には、昔は大抵御輿を擔ぎ廻つたり、花山車を曳き出し、たりして、大層な賑ひであつたが、今は電線が縦横にかかつて居つたり、電車が東西に走つたりするものも一つの原因で、さういふ事はやめになつたが、町内の家家に金屏風を立て廻して、昔の花山車の人形を飾り、軒毎に提灯をつるし、町内の子供が樽御輿を擔いで遊ぶなどいふことは、今の東京などにも遺つて居る。又神社の境内の神樂殿では、里神樂を奏することも多い。この日、家々では赤飯を炊きなどして祝ふのである。

産土神と氏神とは別である。氏神は同じ氏の人人の尊崇した神である。これは、家が段々大きくなつて、分家の分家、又その分家が出来るやうになつて、一族が多くなつて來たので、祖先を同じうする者が共同に祭つた神である。つまり家中の神棚を、更に大きくしたやうなものである。一例をいへ

春日神社
奈良市春日町
にあり。
八幡宮
京都府乙訓郡
八幡町にあり
産土神天皇を主
神とす。

ば、藤原氏の氏神は奈良の春日神社で、遠く祖の天兒屋根命を祭つて居るのである。源氏の氏神は男山の八幡宮であるが、これは頼義義家が尊崇し、義家は八幡宮の社前で元服をして八幡太郎義家と名のつた程であるから、源氏ではこれを代代氏神とすることとなつたのである。これ等はいふまでも無く、家を重んじ祖先を尊ぶ風から起つたものである。しかし、今日では各市町村の住民は、本籍の人はもとより寄留民までも、その居住所の神社を産土神として尊崇し、さうしてその氏子となるので、産土神は氏神と同じやうになつた。

郷土の神、氏の神、いづれも祖先に關係縁故があつて、子孫から見ればなつかしい親みがある。郷土の人人はこれを中心として團結する。郷土の平和をみだす者があり、氏の名を汚す者があれば、おのづからその郷土から逐はれ、その氏から斥けられるのは、ちやうど一家から勸告されるのと同じであつた。

今上陛下
大正天皇

郷土を離れて遠方に出た者の、常に忘れることの出来ないのは産土の社である。海外に出征した兵士の夢に入つたのも、なつかしい産土神の森であつたりう。ひとり山田を守つた父老たちも、日夕この産土神に祈つてあつれば、我が子も國家の爲に盡せと願つたのである。戦死者の爲に記念碑の建てられた場所も、産土神の境内が多い。戦役記念品の置かれたのもここである。明治天皇の御大患と聞いて、東京市民は二重橋の外にひれ伏して御快癒を祈念したが、地方の人人は皆産土神の境内に集まつて祈願した。今上陛下の御大禮を遙拝したのもここである。(芳賀矢丁國民道徳教材書)

神は非禮を受け給はず (俚諺)

正直の頭に神やどる (俚諺)

大木篤夫
詩人。廣島縣
の人。明治二十
八年生。

四 詩二篇

大木篤夫

一 秋のおとづれ

秋ともなれば朝なくに

よき伯父の

白馬しろにまたがり

颯々とおとづれて來む、

むさし野の

森のかたより

待ちわびし蹄や鳴りむ。

二 秋 晝

けやき林の奥のあかるさ。

銀笛吹かば

すみて徹りむ。

その音ねいろ

深く、かなしく、

落葉にかゝる蜘蛛の巢の

かぼそき絲も、

白金いろにふるはさむ。

(風・光・木の葉)

五 言葉の斷續

薄田泣莖

薄田泣莖
名は淳介。詩人。
文章家。岡山縣
の人。明治十年
生。

文章を書くものにとつて、句讀點ほど疎に出來ないものはない。合衆國政府は、この句讀點一つで二百萬弗損をした事がある

何時だつたか同國の政府が外國産の果樹を成るべくどつさり移植してかうした果物の供給で餘り外國に金を拂ひたくないといふので、外國産の果樹輸入は無税にするといふ海關税法を拵へた事があつた。バナナや蜜柑を廉く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多に無かつたが肝腎の法文を印刷する場合に、どう違つたものか、外國産の果樹「フオリンフルーツプラント」といふ言葉の中に句讀點が一つ挿まつて「フオリンフルーツ、プラント」となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。さあ、外國産の果物が無税になつたといふので、蜜柑や葡萄やレモンやバナナといふやうな果物が大手を振つてどん／＼入つて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでに、關稅の收入がいつもよりぎつと二百萬弗少くなつてゐたさうだ。

句讀點といへば、ある時、近松門左衛門の許にかねて昵懇の

近松門左衛門
杉林信盛。號は
樂科子。戲曲作
者。享保七年
(一三八四)歿。年
七十二。

數珠屋が訪ねて來た。その折、門左は鼻先に眼鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つてゐた。數珠屋はそれを見ると、急にきいた風な事が言つてみたくなつた。

「何やと思うたり句讀點かいな。そないなもの、漢文には要るかも知れへんが、淨瑠璃には要らんこつちや。つまり隙潰しやな。」門左はひどく癢に障つたりしかつたが、その折は唯笑つて済ました。

それから二三日過ぎると、數珠屋あてに手紙を一本持たせてやつた。數珠屋は封を切つてみた。手紙は數珠の註文で、なかに「ふたへにまげてくびにかけるやうなじゆず」といふ文句があつた。數珠屋は「三重に曲げて、首に懸けるやうな」とは随分長い數珠を欲しがるものだと思つたが早速そんなのを一つ拵へて持たせてやつた。すると門左は註文書に違ふと言つて返して來た。

敷珠屋は蟹のやうに眞赤になつて、皺くちやな註文書を掴んで門左の許に出掛けた。門左はじろりとそれを見て、「ここにそんな事が書いてあるな。『二重に曲げ手首に懸けるやうな』とあるぢやないか。だからさ、淨瑠璃にも句讀點が要るといふのがやよ。」

(茶點)

六 文章の道

島崎 藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、やうやく岸を離れることができるやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに向うの河岸まで泳ぎこすことがで

きた。更にまた一夏泳いでみたり、焦つて水ばかり飲んでおた頃にはよく解りなかつた水瀬の速い遅いも解つてきたし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たい温かいも解つてきたし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることもできた。板子無しには溺れるほかは無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。普通の泳ぎ手がゆけるところまでは自分も到り得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか／＼容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身のできる人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、たれにでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣さへあれば、そこまでゆくことは決して難く無いに相違ない。」

小諸 信越縁の一驛、長野縣小諸町。

二

信州の小諸こもろに居た頃私は弓を稽古したことがある。だれでも最初のうちには、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても他の矢は思ひも寄りぬ場所へ飛んでいく。射手の心にも頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢を煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私たちの矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私たちに教へてくれた。それから私の私たちの矢は、たとひ的を貫くことができないうやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所をいくやうになつた。

これは文章の道にも當て嵌めてみる事ができる。たゞ好い文章をばかり作りうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作りうと思ふ者は、どうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

七 人の諫

本多正信或時嫡男上野介に語りけるは、昔大殿濱松の城にましましし時、ある夜外様の侍三人御前に召されて、仰を蒙ることありて罷り出づ。その中に一人とまりて、懐より一封の書を取り出して、みづから封を切りて奉る。それは何ぞと仰せられしに、これは某年ごろ諫め奉らんと存ずる所を書き列ねたるものにて候ふ。よき序なれば奉るなり。と申す。殊に御心地よげにて、それにて讀み候へ。と仰せらる。一條を讀み終るたび毎に、申す所ことわりこそあれと仰ありて、十餘

本多正信 三河の人。佐渡守と稱す。家原の謀臣。後藩府の執政となる。元和二年五月卒す(二九八年—二七六年)。上野介 名は正統。幕府の執政となり、後罪を得て出羽に配せらる。寛永十四年四月歿す。(二二七—二二九七年)。大殿 家康をいふ。濱松の城。静岡縣濱名郡。

條を讀み終へて後、我を諫めんこと、この度に限るべからず。
この後も思ふ所ありんには、憚る所あるべからず。汝が志の
ほど神妙の至りなり」と感じ仰せ下さるるに、彼の人悦に堪へ
ずしてまかり出づ。正信御前に在りけるに、唯今の申し條いかに聞きつるぞと仰ありしに、事皆細碎にして國家の大務に
ありず。殿の用ゐさせ給はんこと一條もなく候ひき」と申す
に御手を振りせ給ひて、「いやいや、彼が智を竭して思ひ謀りし
所なり。その智の拙きは如何にせん。彼が年頃時を得て我
を諫めんと思ひしことこそありがたけれ。世の人みづかり
我が過を知ることも多からず。過と知りなば誰か過つべき。
善しと思ひ誤るより過はあるなり。卑しき人は親族朋友互
に諫め争ふことあれば、過をも知りて改めぬ。これ卑しきが
一つの益なり。位貴き者には親族も交疎く、まして朋友とい
ふものもあらず。朝夕日夜、我が前に伺候する者は如何にも

して主の心に逆はざらんことをこそ思ひはかれ、いかでその
過を正さんと思ふ暇あらんや。たとひ稀有にして諫めんと
思ふ者ありとも、その過の大いならん事をこそいはぬ、少しの
事ならんには、さして止みなん。すべては、少しなるが積りてこ
そ大いなる過にもなれ。過既に大いなるに至りては、いかに悔
ゆとも及び難きこともあるなり。されば我が聴く程のこと、
皆耳に逆ふことなくて一生我に過ありといふことを知りて
過ぎぬ。これ高きが一つの損なり。古より家を滅ぼし國を
失ふも、皆諫を聞くことなくて、我が過を知らざるが故にあり
ずや。この事を思ふに、たとひいかなる僻事あらんにも、我を
諫むることならんには、皆忠言とこそ思ふべけれ」と仰あり
き。あり難き御心なりけりと、頻に涙を流して語りけるに、正
純聞きて、その人は誰なるらん。又いかなる事をか申しけむ
といふ。正信聞きて、氣色を損じ、その申しし事も、その人をも

汝が聞きて何の益かあるべき」と答へきとなり。この問答にて、父子の相遠きこと量り知るべきにや。(新井白石—藩翰譜)

福田正夫

詩人

小説家

神奈川県の人

八大地に立つ

福田正夫

冬を凌いで来た樹々の如く、
わが心明るく大地に立つ。

樹々よ緑よ花の野よ、

光は空に流れ、

風ほがらかな四月、

喜はそこから湧出でて、

空に浮く白い雲となる。

立てよを、しく、

我等は若く鮮かな樹々となりう。

光の大空を目ざして

伸びて行く大樹となりう。

苦しみ悩む大地から

高く高く輝く大空へ

見よ、我等の青春は

大地に根を張つて

希望の行手に出發するのだ

(日本近代名詩集)

九思郷

石川啄木

病のごと思郷のこゝろ湧く日なり目にあをぞり
の煙かなしも

やはらかに柳あをめる北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

ふと思ふ

ふるさとぬて日毎聴きし雀の鳴くを
三年聴かざり

若山牧水

地ふめど草鞋聲なし山ざくら咲きなんとす
る山の静けさ

石川啄木
名は一
歌人
岩手縣人
明治四十五年歿
年二十七

若山牧水
名は繁
歌人
宮崎縣人
昭和三年歿
年四十四

窪田空穂
名は通治
歌人
長野縣人

木々はみな聳えて空に芽をぞふくかなしみ
てをれば踏む草もなし
立ちよりてわが驚きぬ若竹の葉未は露の玉
ばかりなる

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富
士が嶺の夕まぐれかな

窪田空穂

草青き丘につけたる一すぢの路あらはして
月昇り来ぬ

あかつきの静けき空に啼き出でて一羽の雀
こゑのさみしき

長塚節

歌人
小説家
茨城縣の人
大正四年歿
年三十七

ふるさとにき、にし蟲のかすかにもまじり
てなくよ蟲責る家に

長塚節

さびしらに母とふたりし見る庭の雨に向伏むかひ
す山吹の花

白はにの瓶こそよけれ霧ながら朝はつめた
き水くみにけり

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしとい
ぬつたるみたれども

なきかはす二つの蛙ひとつ止みひとつまた
止みぬあ我も眠くなりぬ

島木赤彦

島木赤彦
本名は久保田
俊彦
歌人
長野縣の人
大正十五年歿
年五十一

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春と
なりにけるかも

月曇る青葉の道は寂しきか唄をうたひて通
る人あり

旅にありて若布をひさく少女一人ふりしき
る雨にぬれて來にけり

若葉山降りすぐる雨は明るけれ鳴きをやめ
ざる春蟬のこゑ

柳澤淇園

名は里恭。大和郡山の城主柳澤氏の門下。寛文八年(一七二八)歿。年五十三。

夢窓國師

名は疎石。臨濟宗の僧。京都天龍寺の開山

鐵拐仙人

支那に於ける仙人の名

一〇 小話三題

柳澤淇園

夢窓國師の書の書かれたるものに、人は長生せんと思はば嘘をいふべからず。嘘は心を使ひて少しのことにも心氣を勞す。人は心氣だに勞せざれば命長きこと疑ふべからず」とあり。鐵拐仙人の讚に、

仙人は不養生せず腹立てず

ものほしがりずそれで長生

とあり。

二

紹智嘗て土明といふ香爐を得て火いけとなして、朗干法師の訪ひ來られしをりに出せり。朗干法師撫でつさすりつ、これを賞められたり。或時また來りて、その香爐をつくぐ」と

紹智
茶道の宗匠

見て申されけるは「がばかりの名器を何とて火いけにはし給へるや」といへば紹智笑ひて申されけるは「この器火いけとして使ひはべればこそ、貴僧が目にもつきて惜しまれはべるなれ。香爐にして床に置きたらば、さほどには思ひ給はじものを」といひしとぞ。この言葉人の上にも通ひて、いとおもしろし。

三

伏見より年七十歳ばかりなる老翁の土偶人・土器カオリモノのたぐひを擔ひて、洛中を賣りありくなり。常に商小家に來りて食事をするをりからその家の奉公人大勢集りかの翁にいひけるは「御身の擔ひたるものは、その價いかほどばかりの品にか」と問へば翁答へて「銀十五六匁ほどの荷なるべし」といふ。また問ふ京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかゞする」とい

へば、それこそ過なれば、さることなしとはいふべからず。さある時は、そのことをありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くりのものは情にて借り受けて商ひ申すなり」といふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにあらず。その時はまたいかがする。」と詰りいへば、「かに問屋なりとて、数度の無心もいひ難ければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりともいたすより外にせん方なし」といへり。

(雲萍雜志)

釋良寛
越後の歌僧
天保二年歿
年七十五

二月よみの光

月よみの光を待ちて歸りませ山路は栗のいが

釋良寛

の多きに

里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさけに松の音しつ

橘曙覽

橘曙覽
福井の歌人
明治元年歿
年五十七

聞く夜あり聞かざる夜あり秋の蟲鳴きやむ頃になりやしぬらん

たのしみは妻子むつましくうちつどひ頭なり
べて物くふ時

大隅言道

大隅言道
福岡の歌人
明治元年歿
年七十一

さきだちて山路過ぎ行く牛の親に子牛より来る村時雨かな
妹が背にぬぐる童のうつゝなき手にさへめぐる風車かな

落合直文

號は秋運舎

仙臺の人

國文學者

明治三十六年歿

年四十三

霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのば
ゆ風の寒きに
緋織のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞ
おもふ山ざくら花

正岡子規

正岡子規
名は常規

竹の里人とも號す

俳人歌人

伊豫松山の人

明治三十五年歿

年三十六

寝しづまる里のともしび皆消えて天の川白し
竹藪のうへに
新室むろに歌詠みをれば棟むらちかくかりが水鳴きて
茶に冷えにけり

伊藤左千夫

伊藤左千夫
名は幸次郎

歌人

千葉縣の人

大正二年歿

年五十

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとくくと
柿の落葉深く
鶏頭のやゝたち亂れ今朝や露のつめたきまで
に園さびにけり

一二 筍

私の故郷の家には、地續きに小さな孟宗竹の藪があり、それ
から少し奥まつた邊に、やゝ大きい眞竹の藪があります。櫻
の花が咲いて、空に思ひがけない春雷がごろごろ鳴ると、それ
をきつかけに、海では櫻鯛が網に上ります。その頃になると、
孟宗竹にはあつちこつちに、もくもく土がもち上つて、赤茶け
た産毛を生やした筍がひよつこり頭を擡げかかります。

「あゝ筍が……」

私はそれを見つけた瞬間、いひ知れぬ歡喜に胸をふるはせ
たものです。筍は私にとつては、狗ころと同じやうに、短い産
毛を生やした動物だつたのです。私は草履をはいたまま、垣
のこはれから鰻のやうに藪のなかに滑り込みました。あつ
ちでもこつちでも、筍の縮れつ毛の頭を見つけると、自分の踏

んでゐる草履の下かけも、今にもむつくり赤土がもち上りさうな気がして、足の裏が擦ぐつたくて、たまらなかつたのを覚えてゐます。私はそこりの草を掻き集めて来て、一つかみづつそれを菊の上に被せてやりました。かうすれば通りかかりに竹藪をのぞいて見る悪戯つ兒の狡い眼からも遣れられるし、また日光をがかに受けなくてすむので、中味の肉がなかく柔かさを保つことが出来るし、それからであります。

それから私は毎日幾度かこつそり藪へ滑り込んで、人知れずどんなに菊の生長を楽しんだこととせう。親にかく前て物置小屋の狗ころを撫するのと同じ心持です。狗ころが見る度に肥つて行くやうに、菊もその度に寸を伸ばして行くやうに思はれました。實際菊の生長ほど目覺ましいものはありません。午前と午後とでは五寸以上も身丈が違つてゐるやうな事もありました。私はそんなことをしてはな

りないと思ひながら、時々抑へきれない欲望に驅られて、菊の背を手のひらで撫で廻してみたり、又は肩へ手をかけて一寸揺ぶつてみたりしました。菊は強健な脊髄をもつてゐるやうに、びくともしませんでした。

「大きくなれ、大きくなれ。」

私はかういつて土に生えたこの狗ころに挨拶しました。

（薄田泣菫——太陽は草の香がする）

一三 愛國心

人は社會を成して生活するのが本能であるとすれば、人がその住むところの社會乃至國家を愛するのも亦本能であるといへる。如何なる國民も、その國を愛せぬものはない。そ

の方法、その程度には多少の差異はありうが、國を愛するといふ心に於いては、何れの國民も變りはない。その家族朋友を愛し、その郷土を愛し、延いてはその民族團體を愛するのは、蓋し人情のおのづから然りしむる所以である。

然し、國を愛する心があつても、たゞ盲目的にこれを愛するといふ譯には行かない。各の國民は、その國家に就いて、それぞれ自覺するところがなければならぬ。それ故に、我々日本人はこの愛國心を全うするために、立國の大義を明かにし、國體の特徴を辨へ、而して國體の精華を永遠に發揮することに努めねばならぬ。我々日本人はこの日本といふ國家を離れ、日本の國史を離れては、日本人たるの意味をなすことは出来ない。我が國が君主國體として萬世一系の天皇を戴き奉り、血族親愛の關係に於いて萬世無比の國體を成せることは、我々國民の光榮であつて、この天壤無窮の皇運を扶翼することは、

實に我々臣民の本分であり、且又我々の祖先の遺風を顯彰する所以である。

然し、愛國心に就いて聊か注意すべきことは、それが徒らに國自慢となり、排外心となりぬことである。如何なる國も、それぞれ精神的、道德的存在たる人格者を要素として成り立つて居るものであるから、如何なる國家も、また道德的、人格的存在たる一大存在である。随つて相互の國家も、また道德的、人格的存在たる一大存在である。随つて相互の國家の間に、互に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶべきが故に、他國を卑しむべきではない。それ故に、かの平和宣言の大詔にも、「進んデハ萬國ノ公是ニ從ヒ、世界ノ大經ニ仗リ、以テ聯盟ノ實ヲ擧ゲンコトヲ思ヒ」と宣はせられたのである。我々は日本國民として、我が君主國體の最も美しき、最も貴きことを信じ、我が國家の隆盛發展を圖ることに努力すべきは當然であるけれど

も、そればかりといつて、他國の國體を根に非議し、罵詈してはならぬ。米國人はその民主共和の國體を最もよしとしてこれを大切にし、英國人はその君主國體を最もよきものとなしてこれを貴んで居ることを否認すべきではない。それだけの國民がそれぞれ國家を愛する念慮に於いて變るべき筈がないからである。恰もどの家の子もその家を愛する念に於いては變りが無い筈であるやうなものである。

故に、互に各その家を愛する心を尊重するが如く、お互にその國を愛する心を足認し、尊重すべきである。それだけの國家は歴史を異にし、事情を異にし、民情を異にしてゐる。日本の國民の歴史は米國民のそれではない。故に、我々は我が國體美を尊び、これを永遠に發揚することに努力しなければならぬが、米國人がその建國の美を誇り、これを永久に維持しようと努むることを不都合だと非難すべき理由はない。彼等が

國民として當然の心掛を持つことに敬意を拂ふ雅量を持たなくてはならぬ。これが國際的良心ともいふべきものである。茲に於いて萬邦協調して世界文明の上にその特色美を競はしむることが出来る。彼の獨逸が一敗地に塗れて一時立ち難いやうになつたのは、獨逸國民があまりに國自慢になり排外的になつた事に原因したのである。

又嘗に國自慢に陥らざるのみならず、國民はその長所、特質を自覺し、尊重すると共に、その缺點、短所に就いても十分に自省し、自警する心掛がなくてはならぬ。何事につけてもみづから顧み己の短を短つて改めて行くものは必ず自己向上の途に進むことが出来ると同じく、一國民としても、その國民生活に就いて長所、美點を自覺してゐる上に、缺點、短所を互に悟り、互に戒むるのは、又その國民生活を向上せしむる所以である。かやうに考へてくると、我が國民の道德意識に就いて、今

後大いに反省し改造すべき點は無いてありうか我が國民の風俗習慣生活法に就いて改善を施すべき餘地は無いてありうか或は立憲政治に關する諸般の事項に就いて改造を要すべき點は無いてありうか。これ等の事柄に就いて深く省み深く戒め進んで改むるところがなければならぬ。又學問、技藝に關して從來我國民の間から如何なる大思想、大發見、大發明が出たか、世界文明の上に如何なる貢獻をしたか。この邊に就いても亦大いに熟考し發憤せねばならぬものがある。

我々の從來の文明は多くは外國の模倣であつて、我々の創意に係るものは極めて少いといはれて居る。例へば文明の利器と稱せられる汽車、汽船、電信、電話、飛行機等は、何人によつて發明されたかを思へば、我等は從來あまりに模倣的であつたことを顧みて、深く自ら戒めなければならぬ。成程西洋と交際をして彼等の文明に接したのは、まだ日の淺いことであ

大島正徳
倫理學者 神奈川縣の人。東京帝國大學講師。

るからこれまで模倣生活は已むを得なかつたとしても、既に維新以來六十年餘の歳月を経た今日に於いては我々は自ら發憤努力して進んで世界の文明に寄與する覺悟がなくてはならぬ。農業、商業、工業及び教育、學問等のいづれを問はず、凡百の方面に於いて、熱心に研究を重ね、修養を積み努力して行かなければならぬ。希望は未來にあり、青年は未來に生きる。これ等の責任は、皆青年の隻肩に懸つて居る。大いに奮勵しなければならぬ。

(大島正徳—公民道徳)

高等補充國語讀本 全終

終